



幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

2003

3

第102巻 第3号 日本幼稚園協会

CDと解説書がセットになったあそび歌の決定版。
楽器から解放されて、子どもたちと思う存分「あそび歌」で
遊びたいという保育者の皆さんに贈ります。

CDブック①

とんちゃんのあそび歌スケッチブック

—0・1・2歳児のあそび歌—



湯浅とんぼ / 編著
B5判 48頁+CD1枚
定価：本体2,500円+税

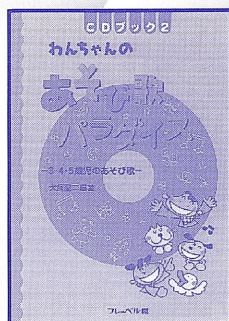
好評
発売中!



CDブック②

わんちゃんのあそび歌パラダイス

—3・4・5歳児のあそび歌—



犬飼聖二 / 編著
B5判 48頁+CD1枚
定価：本体2,500円+税

好評
発売中!



子どもとあそび歌を楽しむのに、ピアノ伴奏はあまりふさわしくありません。なぜなら、ピアノに向かっては、子どもの動きが見えないだけでなく、子どもたちと一体になって遊ぶことができないからです。

①巻は、著者が乳幼児のために曲を作り、実際に歌って楽しんだ15曲を収録しています。

②巻は、著者が全国各地の遊びの講習会で、子どもたちといっしょに歌い踊った作品を中心に15曲収録しました。いずれも、実際の保育現場で長く歌い遊ばれてきた曲ばかりです。

解説書に、楽しいイラストで遊び方を分かりやすく紹介したので参考にしてください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第102巻 第3号



幼児の教育 目次

—第一〇二巻 第三号—

© 2003
日本幼稚園協会

ある日 (4)

巻頭言 いま、「保育の世界」が面白い..... 籾 光夫..... (6)

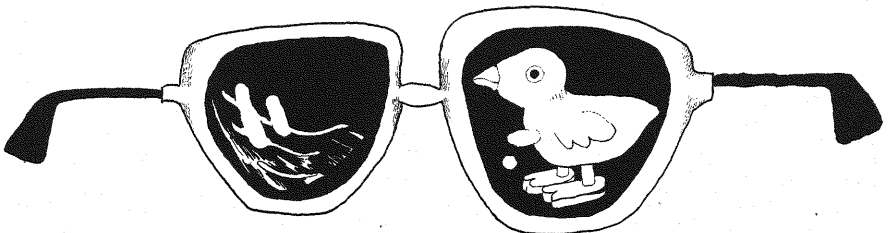
子どもと出会う(2) 根をもつということ..... 岩田 純一..... (10)

障害をもつ幼児の保育(8)―この子と出会ったとき―

手を使うことその三..... 津守真・津守 房江..... (19)

OMEPPアジア・太平洋地域会議における

北京の幼稚園訪問記..... 小川 清実..... (28)



生きものの共存の畝間から (11)

コンパニオンプランツの試み

..... 徳野 雅仁 (36)

ピエール・ブルデューの『実践感覚』を読む

(5)ブルデュー社会学における時間論と象徴資本

..... 安田 尚 (38)

遊びを通して子どもの育ちを考える (5)

シユレッターから生まれたラーメン屋さん

..... 阿部 康子 (50)

立ち止まってみたら

..... 榎田 正子 (59)

表紙絵／南塚 直子

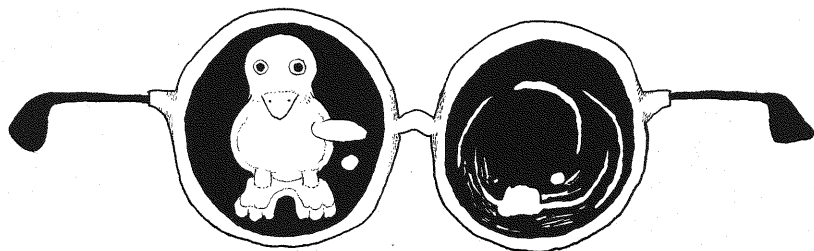
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ

編集委員／田代 和美・高橋 陽子・佐藤 寛子

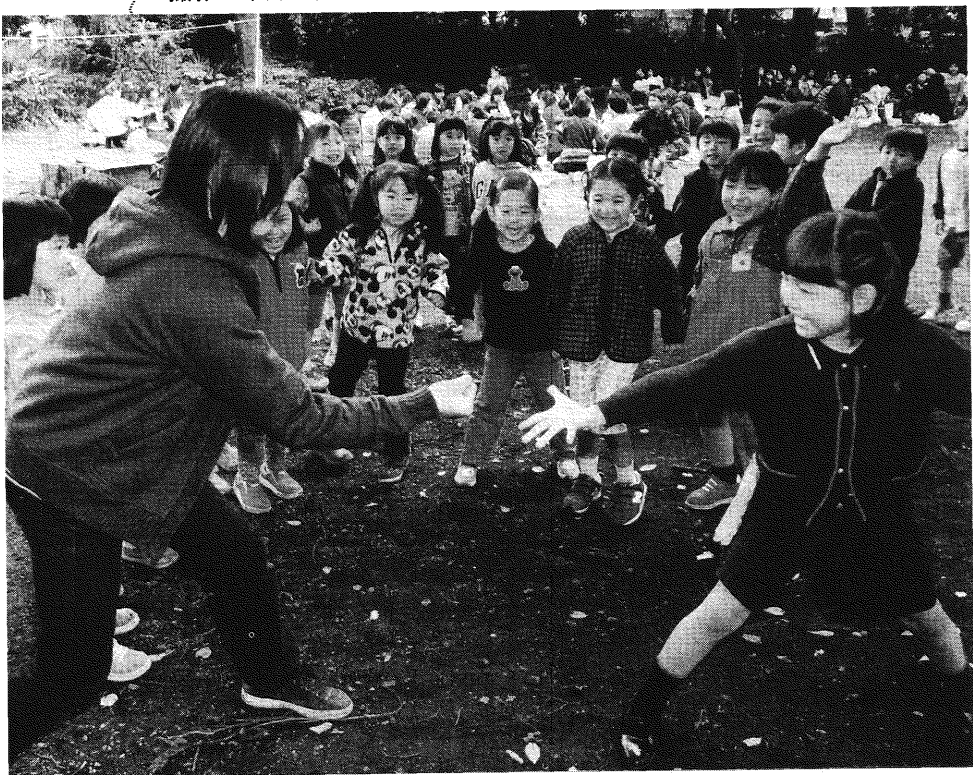
編集部／仲 明子





ある日

撮影・平野 清





巻頭言

いま、“保育の世界”が面白い

籾 光夫

日本の少子社会は、官製の「お見合い」まで現れるほど、深刻になっているという認識がどこかにある。幼稚園では三歳児の保育を定着させ二歳児までも保育の対象としている。保育園では定員を上回る乳幼児の受け入れをしながら待機児童の解消に努めている。様々な少子化対策が打ち出され、保育の現場が努力しながらも、一向に少子化現象は留まるところを知らない。少子社会の根つこの部分が根深い様に思える。いま、保育の現場と関わるひとりとして、この日本の少子社会に対して何らかの見解と接近する手立てが求められていると考えるならば何であろうか……。



〈保育〉が急激に拡大された一九六〇年代、日本経済の高度成長は、各地に新しい団地を造成させ核家族を急増させ、行政が保育園を増設させてきた経緯がある。その担い手は各都道府県の保育専門学院で養成された保育者であり、いわば“公立”による施設と人材によつて担われてきたと言える。幼稚園でも定員が三〇〇名、四〇〇名という大規模園が開設され、その頃、保育者の有資格者を養成する私学の短大も相次いで開講している。

三十年を經過した一九九〇年代に入り、それまであまり馴染みのない“合計特殊出生率”が一・五〇を維持できない少子化社会を日本社会が迎えたことが、高齢化の進行とともに危機感を持つて捉えられ始めた。現在では、高齢化対策と同様に様々な少子化対策が打ち出されながらも合計特殊出生率は一・三〇を維持できない少子社会になっている。

そして、この三十年の年月の間には保育の世界で大きな変化が見える。

そのひとつに、幼稚園、保育園の垣根が限りなく低くなり始めていることがある。保育園の保育時間が朝七時から夕方七時まで延長され、産後五十八日から保育する産休明け保育も実施されている。幼稚園においては、二歳児の保育も検討され、保育園同様時間外保育や子育て支援事業も展開している。改めて、その独自性を模索する状況を迎えている。

そして、もうひとつが、“公設民営化”の動きである。いくつかの自治体では、既存の公立保育園の民間委譲が始まっている。保育園が保育時間を十二時間以上にし、産休明けの



五十八日からの乳児の保育を實踐し、さらに不特定の親子をも受け入れる支援事業を展開していることは、すでに保育園はこれまでの施設のあり方からの変容を求められている。

もつと積極的な理解の仕方をするならば、私たち日本人が共に育つ共同体、生活体を模索する役割を担い始めている。ここで親の責任の取り方や家族のあり方を問題とするのではなく、子どもにとつて育つ環境や社会のあり方を考えると、幼稚園、保育園が既にその地域の中で担い始めているということではないだろうか。

改めて言うまでも無く、幼稚園、保育園は、個人と集団の關係のあり方を学ぶ基本的な役割を担い、生活体として個人の集團のあり方を模索する場である。こうした営みはもはや、行政の主導で運営されるものではなく、そこに参加する人たちで模索されなければならず、行政はそれらを側面から支援することが必然となろう。幼稚園、保育園の實踐の中には、地域の中で子どもと親たちの育ち合う場としての役割を充分に担い、園の行事ひとつひとつがその地域の大切な年間行事に成長し、地域の人たちの参加を得ながら運営されている。こうした園の行事が地域の行事に成長するとき、保育の担い手である保育者の役割も変化する。子どもたちと一緒に遊び回る新人保育者、無我夢中で保育の研修を重ねる中堅の保育者、ゆつたりと子どもたちを受けとめる役割を担うベテラン保育者、親との關係、地域との關係や調整役を担う保育者と、その役割が変化し育ち合っている。そして、



女性だけの社会の幼稚園、保育園に男性保育者の参入の必然性も当然の流れとして求められている。そして、保育者の養成が私学の短大、大学にその役割が移行していることとも並行している。

このような実践に取り組んでいる園長から「保育者養成の教育課程がどうなっている」と問われると、「各養成校が教育課程の大綱化の動きの中で独自性を発揮したカリキュラムの編成に努力している」と答えながら、各養成校はどのような保育者を養成するか、明確な目標を掲げその目標の達成に取り組むカリキュラム編成は、養成校教員の誰もが保育の問題と関わるフィールドを持つことと、教育原理、保育原理といった教科、保育内容、保育実習といった実践的な方法論も担当できる「専門性」が求められ、この専門性は、養成課程の教育実践がまさしく総合学習の実践の場として先駆的な役割を担い、保育の現場との共同研究の可能性を切り開くものに成長することに繋がりたい、と強く思う。

幼稚園、保育園がその地域の中で人の育ち合う共同体、生活体を創造するとき、養成校の教育実践が総合学習の実践の場として成長するならば、その地域に於て相互の交流と共同研究を可能にし、保育の現場と養成校の相互関係の中で、新しい「保育の世界」を創れるだろうと、わくわくして来るのは私だけだろうか……。

(千葉明德短期大学学長)

子どもと出会う(2)

根をもつということ

岩田 純一

鏡に映るじぶんの姿をみて、それがじぶんであるとわかる自己の認識は一歳半ば頃から二歳にかけて確かなものになってくる。しかし、その自己は未だ時間軸上に位置づけられた自己の認識ではないようである。

時間的な拡がりのなかで

ポヴィネリという心理学者は、幼児の自己認識の発達について興味深い研究を行っている。子どもが今までに

したことのないゲームをしている最中に、おとなが子どもをほめて頭をなでる際に、気づかれないように子どもの頭にステッカーをつける。ゲームがおわつた三分後に、子どもはその様子を撮ったヴィデオをみせられる。

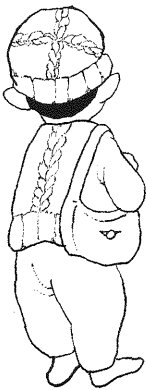
すると二歳児は誰も、三歳児でも二十五パーセントしかじぶんの頭に手をやろうとはしなかったが、四歳児になると七十五パーセントがすぐに頭に手をやってステッカーを取り除こうとしたのである。ヴィデオに映ってい

るのがじぶんであり、頭にあるステツカーに気づいているにもかかわらず、二、三歳児では頭に手をやろうとはしなかったのである。しかし二、三歳児でも頭にステツカーをのせられている生の映像には、その六十二パーセントが、すぐさま(二秒以内)頭に手を伸ばすのである。

このことは何を意味するのであろうか。この実験では、三分後という時間的に離れた過去の出来事を、現在のじぶんの状態と因果的に関連づけて理解できるかどうかをみている。そのような関連づけが、二、三歳児ではまだ難しいのである。じぶんの実体験としてはなかったが、遅延提示された過去の自分の映像をみて、それを今のじぶんの状態と因果的に関連づけるといった自己の捉え方が難しいのである。ポヴィネリによると、四歳頃から可能になってくるというのである。

もし継起する自己を時間・因果的な繋がりの中に位置づけて捉えることができるとしたら、時間的に近い過去の出来事は、遠い出来事よりも、より現在の状態と因

果的に繋がっていることが理解されるはずである。そのことを確かめるために、ヴィデオ提示の遅延時間を操作した実験を行っている。最初に実験室を訪れた子どもとゲームの最中に密かに子どもの頭にステツカーがつけられる。その様子がヴィデオにとられ、ゲームが終了後に、それとは気づかれないうちにとつてしまう。一週間後にふたたび子どもがやってくるが、今度は以前と異なるゲームを行い、同じようにステツカーが頭につけられる。そのあと子どもにも出来事のヴィデオ映像が提示されるが、その際、一方の条件群は一週間前のときのヴィデオであり、他方の条件群は先ほどの五分前のヴィデオ映像である。その結果、四、五歳では一週間前の映像をみ



せても、ほとんどが頭に手をやらないが、直前（五分前）のヴィデオには逆にほとんどが手を伸ばしてとろうとする。しかし三歳は両条件ともに同じような割合（三十〜四十パーセント）で手を伸ばすことがみられたのである。この結果から、三歳児では過ぎ去ったじぶんの出来事を現在のじぶんの状態に繋げて理解することが難しいようである。四歳児になって、自己を時間・因果的に繋がり連続したものと捉えること、すなわち時間的な繋がりのなかで自己を認識できるようになってくるのである。

この四歳という頃には、子どもが自己の複数の表象（過去、現在、未来）を思い描き、心に保持することができるようになってくるのである。今の自己を、今や不在となった過去の自己、未だ不在の未来の自己といったパースペクティブのなかで捉え始めるようになってくるのである。

根にもってかわる

このような自己の時間的な繋がりは、過ぎ去ったじぶんの体験エピソードを自伝的な記憶として編み上げていくことの始まりでもある。その意味で、四歳頃には歴史をもった自己 (historical self) が誕生してくるといってもよいだろう。そして、その自伝的な記憶を物語るようになるのである。

ところで子どもが過去の経緯を根にもつようになるのはいつ頃からであろうか。じつは、根にもつた行動がみられるのはどうも四歳になった頃からであるように思える（拙著『へわたし』の発達ミニネルヴァ書房）。具体的には、さつきへあなたに貸してもらえなかったから、今度はへわたしも貸してあげないといった行動となってみられる。年長児になると、その根はしだいに過去に遡るようになってくる。ずっと以前に意地悪されたから、今はよい機会なので仕返しをするといった報復的な

行動となつてみられるようになる。それだけ、子どもの現在の行動の意味が、点の連続ではなく線や面として繋がった歴史性を帯びたものになってくるのである。

まさに過去の経緯において「わたし」に辛い思いや、悲しい思い、情けない思いをさせた「あなた」を根にもつという現象は、時間的な拡がりのなかで過去のエピソード体験を繋がる線として位置づけられるようになってくることなのである。過去の経緯を根にもつには、子どもがじぶんの経験を自伝的な記憶として今に繋げていけるようになるからでもある。

保育のなかのエピソード

平成十四年度の幼稚園教育研究会が旭川で開催され、「道徳性の芽生えを培う環境と援助について」という分科会での発表を聞く機会があった。そこで報告された事例は、(実践研究の趣旨とは違うが)子どもが「あなた」との過去の経緯を「根にもつ」といった観点から

は面白かった。

最初にあげる資料は茨城大学の附属幼稚園によるものである。

みほは園内外のいろいろな所で遊ぶ女の子です。砂場、水遊び、積み木のコーナー、年長児の部屋など、おもしろそうに感じた場所へ行つて遊びます。片付けをせずに遊ぶ遊びへと移っていくので、教師から声をかけられたり友達からも「片付けなきゃだめよ」と言われています。しかし、そのような言葉に対し、みほは「何でそんな意地悪言うの。あなたなんてきらい！」と言うばかりで、片付けようとはしません。教師は友達が意地悪で言っているのではないことと、自分で使った物は自分で片付けることの大切さを何度も繰り返し伝えましたが、みほの心になかなかしみていきません。

数日後、部屋の中を片付ける時にだいすけとみさとが「ここはみほちゃんが使ってたんだよ」「やりっぱなし

にしてお外に行っちゃったんだよ」と言ってきました。
みほは片付けが終わり、みんながおやつを用意をしているところに部屋に戻ってきました。それを見ただいすけとみさとは、「みほちゃん。片付けしないとだめじゃない。使ったらちゃんと戻さないとだめだよ」と言いました。教師も「みほちゃんが使った所も、みんながきれいに片付けてくれたんだよ」と言いました。他の子どもたちからも「みほちゃんいつも片付けなくてずるいよ」「ちゃんとできない人はだめだよ」という言葉が次々と聞こえてきました。子どもたちの声が静かになると、「ごめんね。みほ、ちゃんと片付けるから、もう言わないで」という言葉が返ってきました。（四歳児七月）

「みほちゃんが使ったところも、みんながきれいに片付けてくれたんだよ」という教師の言葉を介して、いつもじぶんの片付けを皆にまかせて次々と他の遊びに移っていくみほへの不満が一気に爆発したのである。まさにこ

れは仲間がみほと積もりに積もった歴史的な経緯が根にあつたからである。

次のエピソードは東京学芸大学附属幼稚園のものである。

C児がジュニアブロックを並べてエレベーターに見立てて遊んでいる。D児が入ろうとすると、C児は「一人乗りだからだめ」と拒否する。それでもエレベーターに入ろうとするD児を阻止しようと、C児はD児の腕に噛みついた。保育者は、泣いているD児の仲間入りがかった気持ちを受け止めて、C児の思いをもう一度伝えるときともに、C児の嫌な気持ちに共感しつつも、噛むことはいけないと注意した。お互いに「ごめんね」と謝り、いざごさはおさまったように見えた。その後、今度はC児が大声で泣き始めた。D児がC児の作ったエレベーターを壊したからだ。D児は「だってさつき痛かったんだよ」と言いながらも困った顔をして立っ

る。保育者も「そう、痛かったもんね」と気持ちを受け止めながらD児を促してエレベーターを一緒にした。

(三歳児二月)

もうすぐ年中になるD児は、C児の遊びに入れて欲しいのに拒否されるが、なおも入ろうとして嘔みつかれ泣いてしまう。保育者の介入によって嘔みついたC児は謝り、保育者は双方の気持ちに共感しながらも、お互いに「ごめんね」と言わせてその場を収める。双方がそれぞれ納得したかにみえたが、その直後に今度はC児が作っていたエレベーターをD児が壊し、逆にC児を泣かせてしまったのである。保育者がD児に問いたですと「だってさつき痛かったんだもん」と言う。まさに、さつきへわたしに痛い思いをさせたへあなたを根にもったままだったのである。一見、保育者の介入によって収まったようにみえても、ホソネのところでは根にもついていたのである。あやまる許すといった形式だけの解決で終

ても、子どもの気持ちや葛藤はくすぶったままで根として残っていたのである。筆者も年中児でつぎのようなエピソードを体験した。

T児は他の二人の男児と一緒に戦いごっこを始める。

そこにいた観察実習の学生を敵に見立てて攻撃をしかけてくる。しかし、遊びに夢中になっていたT児が勢いあまって砂場の奥にある小屋の屋根に頭をぶつけてしまった。かなり痛かったのか、つぎの瞬間、T児が激しく泣きだした。そこにY児がやってくるが、その表情はT児を心配しているような様子ではなく、どこかむっとした表情で、突然「Tなんて嫌いだ!」とT児の目をみて言う。言われたT児は、少し間をおき、さらに激しく泣き出し、Y児を叩こうとする。(略)

このエピソードでY児の「Tなんて嫌いだ!」は、いい気味だと言わんばかりのニュアンスであった。なぜY児は、通りすがりにこのようなことをT児に投げかけ

たのであろうか。今日二人がときにけんかをしていたというわけでもないのに。じつは、いつもY児は、少し乱暴なT児に主導権をにぎられ、Y児の遊びにいやいやながらつき合わされ、従わされているといった関係にあるそうである。そのような関係のなかで溜まっていたT児への恨みつらみ（根にもつていた思い）が、そのような表現となったようである。

少し長くなるが大分大学附属幼稚園のエピソードを最後に紹介しておこう。

たつお 「先生！ としちゃんが泣いている！」

（略）

教師 「としちゃん。どうしたの？」

としかつ 「泣き止み、はつきりした口調で「まさ君が

ボール投げた」

教師 「まさ君が投げたの。こつちだね、これは痛い、

赤くなっている」



まさゆき サッカーボールを脇にかかえてやって来る。
大声で「サッカーせんから！」

教師 「えっ！ サッカーせんからボール投げたの？」

まさゆき 「『サッカーしよう』と言ったのに」

教師 「分かった、まさ君はとしちゃんが『サッカーし

ない』と言ったらボールを投げたんだね。友達が

『しない』と言ったらボールを投げていいの？」

（略）

中略 （そばにいた子どもたちは「だめだよ、ボール投

げたら」と言う）

（略）

としかつ 「ほく、サッカーしたくない」

教師 「サッカーしたくないと言ってるよ。サッカーし

たくないのにはボールぶつけられて痛かったよね」

としかつ 「痛かった」

教師 「ほら、こんなに赤くなっている。こんな大きい

涙も出てる。(涙を拭いながら) 力の強いまさ君が

投げたボールだから痛かったと思うよ。先生だって

泣いていると思うよ」

(まさゆきはじつと聞いている)

教師 「サッカーは誰とすればいいの？」

かすみ 「したい人とするの。『するよ』と言った人だ

よ」

教師 「そうだよね。『するよ』と言った人とするのよ

ね。『サッカーしようよ』って聞いてみる？」

(略)

まさゆきは周りの友達に「サッカーしよう」と次々に声

をかける。どの子どもも「しない」と答える。

教師 「誰もしたくないの。サッカー楽しいのにね。

あつ、たくや君だよ。たくや君ならすると言うかも

しれないよ。聞いてみて」

まさゆき (たくやに) 「サッカーしよう」

教師 「たくや君、まさ君と一緒にサッカーしたいん

だつて」

たくや 頷く。まさゆき 「『する』と言った」

教師 「よかったね。それまで先生としようか」

としかつは大型二人乗り三輪車で、まさゆきは教師と

ボールを蹴つて遊ぶ。

降園前、まさゆきがとしかつのところへ行く。

まさゆき 「ごめんね」

としかつ (笑つて) 「いいよ」

教師 「まさ君はボール投げて悪かったと思つているの

ね。嬉しいよ」

(三歳児二月中頃)

このエピソードは他児を根にもつことの裏面を示しているように思える。へあなたを根にもつことは、同時にへわたしへがへあなたへからも根にもたれることの理解でもある。相手から根にもたれるへわたしへという意

識をもてるようになってくるのである。先生の介入によつて一見落着いたかのようにみえるが、降園する前、まさゆきがわざわざ自発的に「ごめんね」と謝りに行ったのはなぜであろうか。この行為の意味は、先ほどのこととで「あなた」から、あとまで尾をひいて根にもたれないためではなからうか。根にもたれたくないために、いざござがあつて大分時間が経つても、じぶんから「ごめんね」と謝りに行ったように思われる。

根をもつてかわる

時間的な拡がりのなかで「わたし」と「あなた」の関係を歴史的に捉えられるようになることは、「あなた」を根にもつというネガティブな対人関係だけをもたらずに、先ほどのことと「あなた」を根にもつようになるからこゝろ、先ほどのことと「あなた」に借りができたといった意識をもつようになるのである。それは過去の経緯で「あなた」に恩義を感じてかわるといったこととして

みられるようになるはずである。さつき「あなた」は親切に貸してくれたから、今度は「わたし」が貸してあげる。困っていたとき助けてくれたから、今助けてあげる、といった心理的な行為が出現してくるのである。また、その逆としてプリミティブな形態ではあつても恩を売るといった意識をともなつた行為も出現してくるのではないかと推測される。さらに「あとで遊ぼう」「今度遊ぼう」といった、過去に交わした約束を心に留めていて、その履行を今に迫るといった行為も、同根の現象としてみられるようになってくるのではなからうか。そのような観点から、過去の経緯に「根をもつ」子どもの言動を収集し、関連づけてみるのも興味深い実践研究のテーマとなるであろう。

「あなた」との経緯にこのような「根をもち」ながら、自他の歴史的な関係性が構築され、そのなかで「あなた」とは違う「わたし」のアイデンティティが意識され、物語として形づくられていくのである。（京都教育大学）



障害をもつ幼児の保育(8)

—この子と出会ったとき—

津守 真 (M)

津守 房江 (F)

手を使うこと その三

F 今日、私たち二人でSくんとその仲間のお母さんたち三人で始めた小さなパン屋さんに行ってきました。本当に小さなかわいいお店でその奥のほうで、仲間たちが集まってパンを作ったり、お店にでたりボランティアの人に助けられ、お母さんたちに支えられてみんなで楽しくやっていました。Sくんの小さいことを私たち

は非常に印象深く思っていたので、そのこともお母さんにたずねてみたいと思っていました。

『水遊びのSくん』は、今、洗い物を一手に引き受けて

M 青年たちが働いているパン屋さんは明るくて清潔でみんなニコニコ笑いながらやっていました。小さいとき

のSくんのことを考えると、彼は愛育養護学校の時代には長い間裏庭で水遊びに専念していたのでパン屋さんで何かをやるということには、いったい彼はその何の面白さにひかれているんだろうということ私は非常に興味を持っていました。そのパン屋さんで、エプロンをかけ、帽子をかぶってかいがいしく山のように出てくる洗い物をしていました。

F 幼児期から学童期にかけて水遊びの好きなSくんが洗い物をやっていることに私は感動しました。

M そのパン屋さんの壁には最近Sくんが絵の具で描いた水彩画が貼ってありました。それは黄色と緑と青の淡い色の抽象画のようで、まるで私が水遊びをやっていたときの「水のイメージ」だと思ったんです。そしてそこから思い起こして考えたんですけど、Sくんは確か二歳半から三歳くらいのと時から来てたんですが、その小さい頃彼は絵を描いていたんです。それは壁に腕をいっぱいに伸ばして描くような大きな絵で、水平線と垂直線をまず描いてそしてそこに渦巻きをグルグルと描い

た、そういう幾何学的な絵を描いていたんです。そういう絵はいまは描いていない。

F そう、垂直線と水平線とそれから渦巻きと、対角線を必ずつけて定規で引いたようにきちんとしたものを描く人だったんです。だけどそのうちに遊びの中で絵の具のチューブをぎゅーつとしばらく出して、それが水でにじむっていうのをとても楽しんで、流しの底をいっぱいに画面みたいに使って、いろんな色がにじんでいくのをやっていて、今日また新しい絵を見て「ああ、なるほど」と思って興味深く思いました。

M 何か枠にしばられていたのから解放されたのかも申しませんがね。絵の具のチューブを徹底的に最後までしぼり出すんです。もったいないと思うんですけど、それを最後までしぼり出してしまいう子が、学校にはいつの時代にもいるんですよ。そんな子どもの一人だった。

遊びの中で物質のイメージを手で追求したSくん

F 今日お母さんと話してた卵の話をちょっと話してく

ださい。

M 来始めたころの話なんだけど、家で夏休みに風呂で水遊びをしたとき、水の中に卵を割って、卵がずーっと沈んでいくのを手ですくい上げ、壊さないようにして、また水の中へ戻してまた沈んでいくのをすくい上げるって、お母さんは話していました。

M 私もSくんがその黄身をすくい出すということを実に不思議だと思ひ、その手の使い方のその技術ってのはね、僕なんかにはとてもできない大したもんでした。Sくんは手をよく使う人だったからって言ったら、お母さんは「そう、この人は小さい時から手が器用だ」って言いました。

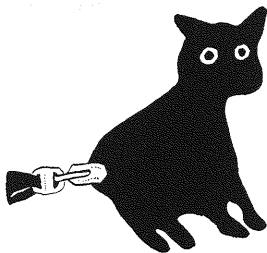
F そうそう、お母さんは、指先がとても利くんですよね、って言って、だからホースで水遊びをしたときにホースの先をぎゅつと握って細く勢いよく水が出るようにしたり、太くしてやったり、遠くへ飛ばしたり、いろんな飛ばし方があって、その物質のイメージをとでも楽しんでいた。そのことの延長線上に今日の洗うっていう

ことがあるんでしょね。

M 水遊びの時期が長くてね、本当に水遊びしかやらないという思いを大人に抱かせるようなやり方だったんですね。心の中にはいろんなものをたくさん抱えてる子どもだということは、じきに分かってきて、それからその水遊びも注意してこちらがその気になって見てみると、やり方は毎日毎日違つてるといふことも分かつてくる。でも外から見ていると同じ水遊びとしか見えない。

F 付き合う人にとつては、何も形にならないとき、それはどういう意味があるんだらうかっていう疑問が起こつて、保育者たちも親たちも本当にだんだんと苦痛になつてくるんですね。

M その初期のころ、まだ三歳か四歳くらいるとき、お弁当のときにお茶を入れたポットを一つ取つたら軽い、もう一つを別の手で



取ったら重い。軽い方のふたを開けたら空っぽだった。

重い方をふたを開けていっばい入ってるそのお茶を空のポットに注いだ。全部入るとまた空になった方にお茶を注ぐ。それを何度も何度も繰り返しているうちに小さい子どものことだからだんだんにお茶が減ってしまつてついになくなつてしまつて、床が水浸しになる。毎日お弁当のたびにね、そういうことを繰り返していたんですね。それからもうひとつ、私が忘れられないのは、お人形が好きだったこと。ある一人の職員がお人形を描いたら一瞬ぱつと目が光つて、そのお人形の紙を手から離さなかつた。孤独と見えるくらい裏庭の隅で水をやってたんだけれども、人のことをいつも心に思っていたんだなと思います。

F 今日私たちが訪ねて行つてもうれしさを顔には出さないうで、私たちが話しかけるのを照れ臭そうな顔をしていました。

そうやって手を使つていろんなものとふれたつていうことはぎゅつと握る指先の力が強くなつただけじゃなく

て、やわらかい卵をすくい上げるような、やわらかいものに対する繊細な注意深さがあつて、こういうところに表われたのではないかと思うんですね。お母さんはその卵の遊びをやることを実に奇妙なこととして、また食べ物遊びに使うつてことであんまりいいふうには考えなかつたでしょうが、でもこうしてみるとものに対する繊細なふれ方つていうのがもともとあつたんだろうと思います。お母さんが今日、やわらかいパンをつかむときはぎゅつとやらないでそおつとトングつていうんですね、あのはさむものでそおつとつかむつていう話をしてられましたよね。

パン屋さんを始めるときに

M お母さんたちがパン屋さん始めるつて言つたときに、周りの大人たちは「え、この子たちがパン屋さんやつたつてパンはグチャグチャになつちゃうだろうしつまみ食いするだろうし、こんな子たちが作つたパンなんか売れないんじゃないか」つて言つたつて話をしてまし

たよね。ところがいざやり始めてみるとこの子たちは、パンをつかむときにはそおとつかんで、ぎゅとつかんで食べられなくなるなんてことはしたことがないし、つまみ食いもしたことがない。これも注意したわけじゃないけれどこの子たちはしていないということでした。

で、私はいつもこの子たちに会うときに、この子たちは、なんでも心の中で分かっていると思うことが多いんです。ちよつと見ると何にも分かっているという風に見えることはもちろんあるんだけど、何でも分かっているとって付き合ったほうが、間違いがない。分かっているとって付き合うと大人はその子に対して荒っぽくなる。こうやって長い期間を通してみるとね、あの小さいときから分かっていることが多いという気がします。

F それは本当に大事なことです。この子たちは言葉で表現出来ないし、やることも分かりにくいことが多い。それでどうせ分からないだろうって、頭ごなしにことを進めてしまったら、この人たちに対して本当に失

礼なことだし不幸せにしてしまうんだなって思いました。このお母さんたちはみんな一人ずつ違うから、その一人ずつの違ったところを大事にしていこうと考えて、パン屋さんをやっているのでしょうかね。

M そう、パン屋さんを中心になって始めた三人のお母さんたちがみんな口々にそのことを言っていたよね。一人一人全部違うんだから、一人一人を大事にしてパン屋さんもやろう。で、パン屋さんが採算が合うかどうかということはその次のことであって、それぞれが楽しめるようなお母さんたちも楽しめるような、そういうパン屋さんにしようといって始めたんだということだね。

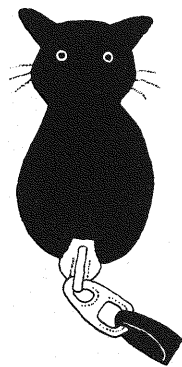
手放さずにもっていたもの

F いつも手に何かを持っていたのはいつのことだったかしら。

M 成長の途中には本当にいろんなことがありましたよね。小学部に行ったころ、いつも学校に来るときにお母さんと一緒に来るんだけど、グレープフルーツとか夏

みかんとか丸い果物を抱えて来るのね。それで夏なんかそれを一日持つてるとぐちゃぐちゃになってしまう。でもそれを手から離さない。そしたらお母さんが言うには、もうこれは本当に一日中だ。それからあと二つあるんです。きょうだいの学校で使う三角定規と、四角いノートと三点セットにしていつも抱えて学校に来て、学校にいる間もその三つは手に持つてるかそばに置いてくかで、それを誰かが蹴つ飛ばしたり持つてつたりすると彼は怒ったのね。

F 他の子どもたちでも自分で手放せないで何かを持っている人はたくさんいますよね。例えばジュースの缶とか、ストローが好きでストロー持つてた子もいる。ぬいぐるみなんかはかえって分かりやすいですよ。ぬいぐるみを抱いてくるとそれに頼ってるのかしらと思ったりもするけれど、そういう分かりやすいものじゃなくて缶とか瓶とかそういうものが大事で、持つてる人は何人もいるんだけど、それはSくんのことを含めてどういうふうに考えたらいいかしら。



M いま、何回かにわたって「手を使う」ということについて話してるんだけど、手でもものを持つことを最初にテーマとして取り上げましたよね。子どもが自分の手にもものをつかんだとき、その子の世界が変わるんだと思う。自分の手にもものを持つことによってそのものが自分のものになるんであって、手にもたない時期には、それは自分とは関係がない。手放せないでいつも手に持つているということは、そのものがその子の心の奥の方と結びついたものではないかと私はいつも考えています。だから子どもが手に持っているものが何であるかを注意してみると、その子の心の中にあることが分かる。そう思ってみると非常に面白い。

F だから、変なものと思ってても置いて行きなさいと

か、そんなもの持って来ちゃダメとかそういうのは不当なことになるわけですよ。

M そう、全くその通り。それでこの子がね、三角定規と四角いノートとそれから丸い夏みかんと手に持つてるのを見たときにね。私は非常に驚きまたうれしく思ったんです。フレーベルが言っている森羅万象の基本となる三つの形、大きな宇宙の基本が彼の心の奥深くにちゃんととらえられているというふうに僕は思いました。

F 興味深いことだと思うけれど、何か持ってしまうと動きが取れなくなるっていうことはどう考えたらいいでしょう。

M Sくんのお母さんが、このことで困ったこともあって、そのぐちゃぐちゃになったグレープフルーツを手にしたまま電車に乗ってくる。それから学校にその三つのうちどれか一つを忘れていくと家に帰ってからもう一度それを学校に取りに戻ってくる。それがもう何回あったか分からない。このお母さんは、良くそれに付き合ったね。彼は森羅万象の基本をいつも持って歩いてるんだ

から、彼は哲学者なんだねと、帰りがけにお母さんとおしゃべりしました。

F 森羅万象を持って歩いているけれども現実のかばんとかそういうものは持てなくなってしまうかもしれないと思ったんだけど、あんまりいろんなものを握りしめている場合、新たなものに発展することは難しくなっていくると、そのことが変化していくというのがいつものパターンだったように思うの。だから変化するんだけど忘れちゃうわけじゃなくてその延長線上でまた戻ってやっているような気がします。

M それで今日もね、Sくんのお母さんがね、言っていたけど、水遊びをどうしてもやめないと、ほっとくんじゃないなくて、大事にしてもそれを見守っている。それを大事にして一緒に生活しているうちに変化する。

F お母さんは生活人として家庭生活などで困ることがあったらこっちの困ることもSくんにはつきり提示する、これでいいんだわと思ってやらしておくことが自主

性を育てるように見えるけれども、本当はそういうと
きって放してしまっているときが多いからってという話
をお母さんがしましたね。それも私が今日考えさせられ
たことの一つだったんです。

持っているものの意味っていうのは分かるけど、持
っているものを手放す勇気とか変化するっていうときの、
こだわりが強いって言われる子どもにとつての大変さ
っていうのがあるんじゃないかと思っただけです。それはど
う考えます？

M そういう最中っていうのはね、一緒に付き合っ
てる者としてもね、いろんな疑問がわくわけですよ。これ
でいいの、なんか違うものを提示したらとかね。僕も
そういうことを、毎日毎日考えながらやってね。それで
彼が興味を持つようなものを、用意しておく。そういう
ときには、そうね、ちょっとはそれで遊んだこともある
けれども、まあ二日と続かない。横目で見てとたんに放
り投げたり、それでも見向きもしない。今日お母さん
に話したら「本当にそうですよね」、たいがいそれは受

け付けられなかった。この子と対話しながら日常生
活を進める気持ちで付き合っていました。Sくんのお母
さんはね、本当に良くこれくらい付き合うと思うほど、
例えば石鹸遊びとか、それから家の台所の容器はもう
しょっちゅう空っぽなんです。よつてお母さん言っただけ
ど、そのくらいいろんな日常の中でSくんに応じて答え
ながら家族の生活も整えていた。

パン屋さんを作った親たちの心意気

F 手を使うことと物質のイメージとがうまく調和し
て、青年期になって二十歳を超えたときにパン屋さん
やれるようになってきたのだと今日お母さんの話を聞い
て思いました。初めは何の公的な支援もなく、自分た
ちだけで始め、他の人はみんなそんな行く先の分かん
ないものに賛成する人は誰もいなかった。三人きりで始め
た中で、今も思っていることは「人に頼らないこと」。そ
れから「欲張って儲けようと思わないこと」とか、それ
から「楽しんでやること」。そういうことが現実的なこ

ととして生活全体を押し上げていて、お母さんも生き生きしてたし、子どもも生き生きしてたと思いました。

M 今日見ても、Sくんだけでなく、他の人たちもある人はびよんびよん飛びはねていたし、もう一人の人が僕らの帰りがけに自分の好きな歌を歌ってくれたしね。その歌がとってもよくってね。何の歌だったかしら。

F 子ども賛美歌。

M 子ども賛美歌の本当にこちらも和むような歌を歌ってくれたり、それからある人は…。

F お客さんが来ると出て行ってパンを売りに行くとかね。もうそれぞれなんですよね。Sくんは洗い物を一手に自分で引き受ける。

多くの親たちは市や町でやってくれる作業所に子どもを通わせて昼間子どもが家にいなければそれでほっとするといったような具合なのに、この三人の親たちはそういうのではなんだか変だと思ひ、そして中高の公立養護学校の中では一番何もできないと言われていたその三人で、小さな作業所兼パン屋さんを立ち上げたのです。パ

ン屋さんを始めたと言うと、そんな大変なことと言われなければならない、「人に頼らないこと」「欲張って儲けようと思わないこと」「楽しんでやること」を守って、自分たちで一緒に生活できればいいと思えば、誰にでもできることなんですと話されました。今日帰りの自動車の中で言われたSくんのお母さんの話にも同感しています。

F 今日本当にSくんのところに遊びに行つて、楽しい秋の日を過ごした良い日でした。それでおしまいにしましょう。



OMEPPアジア・太平洋地域会議における

北京の幼稚園訪問記

小川 清実

はじめに

毎年行われるOMEPP世界理事会のなかで開催されるアジア・太平洋地域会議が、二〇〇二年は、世界理事会とは別に、北京で開催された。OMEPP日本委員会への支援のもとに、OMEPP中国委員会がホストとなり、九月十五日から、二日間の会議と九月十七日に幼稚園訪問を企画し、また

ちは北京の二つの幼稚園を訪問する機会を得た。アジア・太平洋地域会議の内容は、OMEPPニュースに譲ることにし、ここではOMEPP中国委員会が準備してくださった、幼稚園について報告したい。OMEPP中国委員会のメンバーのほとんどが北京師範大学教育学部幼児教育専攻の教授たちであったためか、私たちが訪問した幼稚園は、北京師範大学の敷地内にある北京師範大学附

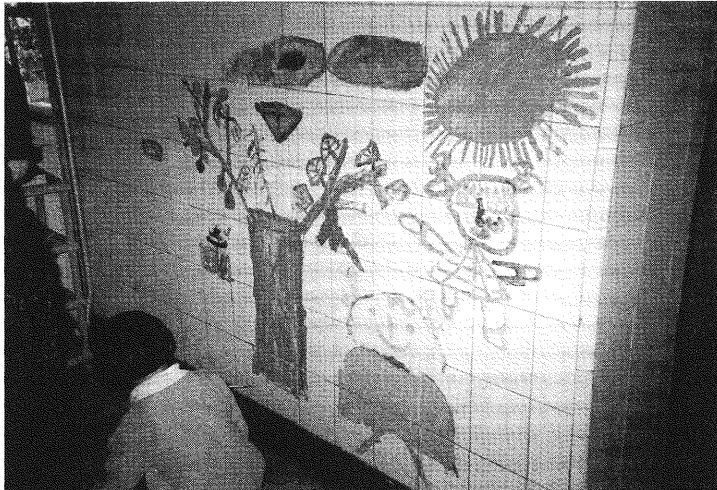


属実験幼稚園と、北京師範大学の指導を受けている北京市第五幼稚園の二つであった。

北京師範大学附属実験幼稚園

広大な北京師範大学の一角にある、これまた広大な幼稚園の中に、二階建の三つの建物があり、五百八十人の幼児が在籍している。園庭には大きな木が何本もあり、色鮮やかなプラスチック製の大型遊具が点在していた。幼児教育の勉強に來日した経験のある、三十歳代前半と思われる若い女性の園長先生の説明を受けながら幼稚園の中を見て頂いた。

まず、五百八十人という子どもの数の多さには圧倒されたが、広いせいか、子どもが多すぎて大変という印象はなかった。子どもたちのクラス編成は、二歳六カ月から六歳までの混合クラスが十八学級、二歳から六歳までの同年齢によるクラス



◀廊下に描かれた絵（北京市第五幼稚園）



が十二学級、その他にベビークラスが三学級あるという。一クラスの担当の保育者は四人である。

内訳は二人の教員と一人の助手、そして一人の実習生である。教員の総数は六十人以上である。保育時間は、デイケア、すなわち毎日登降園している子どもは、朝七時から夕方の五時までである。ボーディング、すなわち宿泊している子どもも多くいるので幼稚園に子どもがいなくなるのは、土曜日と日曜日の二日間ということだ。

中国では、月曜日から金曜日までは子どもは幼稚園に宿泊することは普通らしい。この附属実験幼稚園でも多くの子どもが「お泊まり」をしている。私は中国の幼稚園では子どもが宿泊することを知っていたのだが、北京師範大学の附属幼稚園でもそうであるとは思いもなかったので、何人の子どもが「お泊まり」であるのかを聞き忘れたのは残念だった。

この園長の指導教官は、北京師範大学教授であり、O M E P 中国委員会の会長でもあるパン博士であり、現在彼女は博士論文を執筆中である。

意欲的な園長を中心に「保育の質を高める」ことを目標に、大学の研究者たちと交流しながら日々の保育活動が実践されている。特に次の点に重点を置いている。

まず第一に、一九九四年からモンテッソーリメソッドを導入したこと。以前からモンテッソーリのことは知っていたが、教具を入手することが困難であったが、やっと導入できた。

第二に科学的知識などそれぞれの分野でより専門性の高いカリキュラムのプロジェクトの研究の
実践。

第三に遊びが知的な発達にどのような影響を与えるのか、きめこまかな研究の推進。

以前行っていた教師主導型ではなく、子ども自



身が活動を決めることが大切であることがわかり、子ども主導型に変わったという。子どもがやりたくない活動を無理にはさせない。子どもの主体性を大切にする保育である。モンテッソーリの教育に加えて、現在はレジジョエミアの教育も取り入れている。

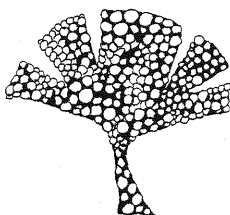
四歳児クラスの様子

約三十人の子どもが保育室の中でそれぞれ、自分で選んだ活動をしていた。モンテッソーリメソッドのような印象を持ったが、よく見ると、モンテッソーリメソッドでは見たことがない教材もある。保育室の中に絵を描いたり、折り紙をしたり、空き箱製作ができるようなコーナーが用意されていて、ひとりひとりの子どもが自分が見たいことをしていた。また、モンテッソーリ教具ではない、数や長さなどの認識が育つような活動が用

意されているテーブルがあったり、少し広い場所で積み木をしたりというような子どもの様子であり、基本的には子どもはひとりひとり、自分がしたい活動をしていた。担任教師の説明によると、一人の子どもは三つの活動をすることになっていくという。この時間は外では遊ぶことはできない。この活動が終わると、子ども全員が教師に伴われて外に出て行った。しばらくは園庭にある固定遊具で自由に遊んでいた。

入園したばかりのクラスの様子

中国の新学期は九月なので、入園したばかりの子どもたちは、月曜日から金曜日までの長い期間、親と会えない寂しさを保育者は十





分に理解したうえで、特別なプログラムを行って
いる。子どもたちが自分の好きな遊びをする前に
幼稚園に安心していられるように、保育者は子ど
もとスキンシップを図っていた。保育者のやさし
い、静かで、落ち着いた声は子どもたちを安心さ
せる効果があるようだ。親はいつでも好きなとき
に自分の子どもを家に連れて帰れるそうだが、入
園直後はそうではないのかもしれない。子どもた
ちは保育者たちを心から信頼しているようだつ
た。

中国の親にとっては当然のようだが、まだ二歳
六カ月の子どもを五日間も幼稚園に預け続ける気
持ちは、私にとっては理解することは難しいと思
った。

保育者の話し合いと親との連携

月曜日から金曜日まで子どもがいるということ

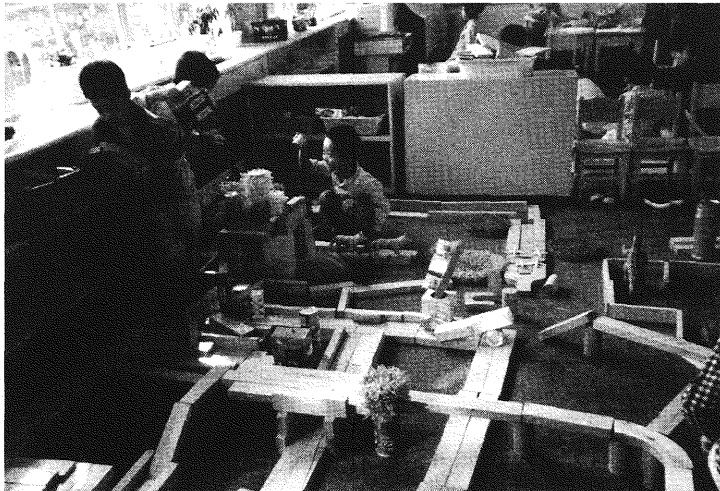
で忙しそうだが、保育者たちは、子どもの昼寝の
時間に、保育の研究について話し合ったり、大学
の研究者たちから指導を受けたりしているとい
う。四人の保育者のうち、一人が子どもの世話に
当たり、残りの三人が話し合う。また、月曜日か
ら金曜日まで宿泊する子どもとの親とはほとんど
えないが、よく電話で話すのだそうだ。親が子ど
もを家に連れて帰る連絡も子どもとの昼寝中にあ
る。保護者会は一学期に一回は開く。保育者は子
どもの活動の様子を写真に撮り、保護者に写真を
見せて成長の様子を説明するという。

保育者たちの交換留学も盛んで、十月には二人
の保育者がイギリスの姉妹園に留学する。園長自
身もアメリカに勉強に行きたいと話していた。な
お、この園は日本の幼稚園とも姉妹園の関係を結
んでいるので、これまで何人かの保育者が日本に
留学している。



北京市第五幼稚園

北京市の南に位置し、一九五四年に創立された。幼稚園の門の横に「この幼稚園は第一級幼稚園である」という看板が掲げられているのが印象的であった。この幼稚園には外国から訪問者が多いらしく、英語のパンフレットが用意されていた。四十歳代半ばと思われる精力的な女性の園長先生に案内していただいた。敷地面積八千二百五十平方メートル、建物面積五千六百平方メートルで、樹木が豊かな庭がある。三歳から六歳の子どもが四百八十人在籍。三歳―四歳クラスが三学級、四歳―五歳クラスが五学級、五歳―六歳クラスが五学級の全部で十三学級あり、八十七人の教員が保育に携わっている。この園では、二百八十人の子どもがデイケア（昼間のみ）で、二百人の子どもがボーディング（月曜日から金曜日まで



◀ 普通保育室での町づくりごっこ



宿泊)である。十二人の料理人がいる。この園の特色は科学教育とレヅジョエミリア教育であると説明された。科学教育の部分では北京師範大学出身の研究者であり、O M E P 中国委員会事務局長でもあるラオ女史が中心になって指導に当たっている。

科学的遊びが集中して行われる科学探索室では様々な活動が準備されていた。子どもは自分の好きな活動を選んでしていた。摩擦を調べたり、重さを量ったり、子ども自身を包むような大きなシャボン玉作りというような活動や、ろくろを回して土を皿や器の形にしていたり、本物の動物のはく製を写生していたりである。すべての子どもが何かの活動に夢中になっていて、一人としてつまらなそうにしていた子どもがいなかったことは、子どもにとってこの部屋の環境は適當だと言える。特別室ではない、普通の保育室でも部屋を

いくつかのコーナーに仕切って、ブロック、積み木でごっこ、カセットで音楽を流してリズム、絵本を見るなどの活動が行われていた。その中におろぎは何がもつとも好物かをテーマに、本物のこおろぎにハムや果物や野菜などを食べさせ、どの食物をもつとも好んだのかを記録する用紙が用意されていて、子どもは記録していた。

他の保育室では、いくつかの果物があり、まず味を予測し、実際に食べてその味を確認するという活動があった。甘いか、からいか、苦いか、酸っぱいかを記録する、部屋の壁には「仮説を立て、実験しよう」と書いてあった。私たち、訪問者は、そこにある梨などの果物があまりにおいしくて、仮説を立てずにおいしくいただいたのだが、子どもたちは特に気にもせず、食べてみて、記録をつけていた。科学教育が特別なものではなく、子どもたちの活動の一つになっていることを



◀ 科学探索室の様子
奥の二人はろくろを回している



知った。

おわりに

私はOMEPP中国委員会が用意してくださった二つの幼稚園を紹介することしかできないが、北京の貧しい地域では一クラスに六十人の子どもが、たった一人の保育者に保育されると聞いた。子どもは一つの机に四人もすわっての教師主導型保育であることは言うまでもない。実際にはいろいろな幼稚園があるのだが、ただ言えることは、中国が目指す幼児教育の姿は、子どもの主体性を大切にする保育であることは間違いない。

(埼玉純真女子短期大学・

OMEPP日本委員会事務局長)

*写真は北京市立第五幼稚園の様子(三枚共)

コンパニオンプランツの試み

徳野 雅仁

スペースにゆとりがない菜園で、多くの野菜を育てる方法として混作があります。混作は、数種の作物を同一の畝で栽培する方法で、作物同士が互いに支障をきたさず生育を助け合えるものを選んで共栄させるものです。

それは、根張りの浅いものと深いもの、草丈の大きいものと小さいもの、十分な日照を必要とするものと半日陰でも育つものを組み合わせると有効にスペースを生かす栽培法です。たとえば太陽が南から低く射す秋まきでは、畝の北側一列に背の高いハクサイなどを植え、南側に背の低いタアサイ、ラディッシュなどを栽培することにより互いに十分な日照が得られます。半日陰でも育つものはハクサイの北側で育てれば、一緒に植えても共に生長を阻害することはありません。

混作にはこのほか、一緒に育てることで病害虫を防いだり、生育に効果がある組合せがあり、これらをコンパニオンプランツ（共栄植物）と呼んで、今、もつとも注目されている安全な栽培技術です。

コンパニオンプランツとして古くから知られているのは、アブラナ科の野菜であるキャベツなどを食害するアオムシを防ぐため、モンシロチョウが嫌うハッカやサルビア、ニガヨモギ、セージを一緒に植えることでした。また、ジャガイモや、マメ類、トマトの根に寄生する線虫を退治するということでマリーゴールドは有名でした。

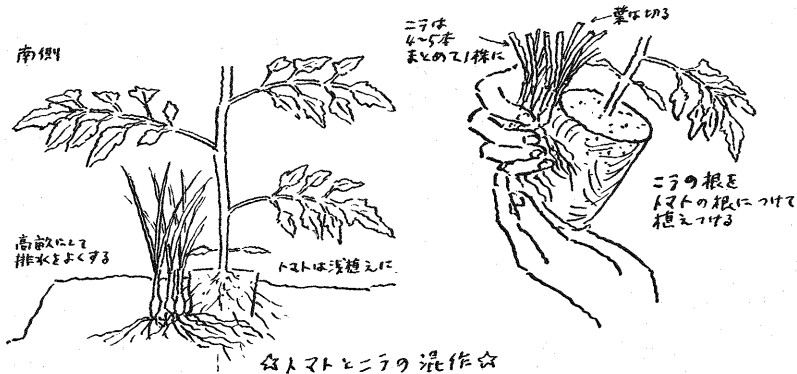
このように虫を追い払い害虫が少なくなる組合せには、トウモロコシとエダマメがあり、エダマメにつくカメムシが見られなくなります。春にホトケノザが繁茂する畑で虫害が少ないのは、ホトケノザに虫を忌避する成分があるからだということもわかってきました。

病害を防ぐ共栄植物として何度か試み驚いているのは、トマトとニラの混作です。トマトを植える際にニラと一緒に植え、ニラはトマトの南側に、根をトマトの方に向け接触させて植えこみます。ニラと一緒に植えたトマトは病気になるにくく、莖葉は健康的で勢いがあり、老化も遅くなります。購入時に、すでに病害に感染していた苗であっても、進行は遅く、円形もしくは不整形で暗褐色の病斑が生じる輪紋病（りんもんびょう）に感染しても、病斑部のみ円形に枯れて抜け落ち、莖葉全体は元気に回復したかのように立ち直ります。トマトはまた、キュウリ、トウガラシとも相性がよく、一緒に植えると共に元気に育ちます。

春に生長するマメ科のカラスノエンドウは土を肥やし、マメ科の作物やトウモロコシはいろいろな作物との共栄に効果があります。

コンパニオンプランツは、雑草との共生で健康に育つ自然菜園が実証できるように、植物個々の性状を活かした安全栽培に役立つ栽培法です。

（イラストレーター イラストも筆者）



☆トマトとニラの混作☆

ピエール・ブルデューの『実践感覚』を読む

(5)ブルデュー社会学における時間論と象徴資本

安田 尚

今回は「第六章 時間の働き」と「第七章 象徴資本」を読んでみよう。実践が時間のなかで展開されると、このことに着目すると何が見えてくるのであるのか？ また、ブルデュー社会学に独自の概念である「象徴資本」とは何か？ この二つの章は、こうした問題を取り上げているわけだが、先取りして言えば、六章では実践に時間を介在させて見ると「合理的計算」でも「規

則」や「規範」への従属でもない「戦略」が実践に目的性を与えていることがわかる。さらに、第七章では、「経済資本」とは異なった、それ自体は物質的に「無益」であり「只のもの」である「象徴資本」が実践や社会関係において重要な機能を果たしていることが明らかにされる。

実践における時間の機能

さて、第六章では前回ふれた「実践が時間を…戦略的に使う」（前号、五〇頁）ということが、「贈与論」（マルセル・モースのポトラッチ論）やカピリア族の儀礼などを例に展開されている。

「実践は時間の中で構築され、時間から継起の順序という実践の形態 (forme) と、またそれを通して実践の意味^セ方向^ス (センスの二重の意味で) を受け取るという特質」を持っている (二六二頁)。つまり、人間の行為は、絶対的な条件として時間の経過を通じて展開されるのであり、この時間的な展開や順序から行為の意味が生まれるのである。これは全ての実践について言えることである。贈与交換や儀礼的行為のような他者との行為のやりとりを考えてみれば、その成り行きは行為者にとつては不透明、つまりどう相手が出るか「予見しがたい」のであり、「不可逆的で方向づけられた継起」(次々に起

ること)」、つまり一連の後戻りできないやりとりなのである。

客観主義の「贈与論」と時間

ところが、客観主義はこうした点を見落としてしまふ。それは、レヴィストロースの「モース論文集への『序文』」(註一)に典型的である。ブルデューは、このレヴィストロースのモース批判に対して次のように反論する。

レヴィストロースにとって「交換は『本源的现象であつて、社会生活によつて解体されたばらばらな操作ではない』、言い換えれば互酬性の循環の『機械的法則』は返す義務と受け取る義務から成る贈与する義務の無意識的原理であることを提示するためには、科学は土着の経験とこの経験についての土着の理論と手を切らねばならない」(一六二―三頁) ことになる。

つまりこれは、アラスカ、ポリネシア、メラネシア等

の諸民族に伝わる風習であるポトラッチ（氏族の有力者間で行われる覇を競い合う「義務的贈答制度」）（註2）のことである。レヴィ・ストロースによれば、ポトラッチには贈る義務―受け取る義務―お返しをする義務という「三つの義務」（註3）があり、彼はこれを「互酬性の循環」という「機械的原理」、「無意識的原理」としている。要するに、構造主義的な解釈がなされているわけである。つまり、行為当事者の主観をこえた客観的「原理」や「規則」に従って、この「三つの義務」は一つのシステムとして常に実行されることになるというのだ。しかし、このように「三つの義務」が、一体のものとされてしまうと、「時間」の入り込む余地はなくなる。

ところが、こうした一連の交換過程に時間を挿入してみれば、必ずしも贈られたものがお返しされるといふ保証のないことが分かってくる。ブルデューは言う。「実際のところ、人が忘恩の徒に恩を着せるときには、贈り

物はお返しなしにおこなわれる」（一六三頁）。すなわち、贈り物をされた人が恩知らずだと言われてもかまわないと言うなら、その人は贈り物にお返しをしないことだつてあると言うのである。レヴィ・ストロースのように「互酬性の循環」を無時間の「機械的法則」に仕立てあげてしまうと、こうした「不確実性」、つまり予測しがたい行為者の主体的選択の余地は、存在しないことになる。だから、「学者」（つまり、レヴィ・ストロース）は行為当事者たちを、理解しがたいメカニズムによって知らない目的に向かって突き動かされる自動機械あるいは惰性的物体にしてしまうのである」（二六三頁）。これは、学者の観察者の視点である。客観主義は実践から時間を抜き去って（デタケンポライゼ「脱時間化する」）、あたかも実践が時間のない世界で行われるように描くのである。

時間は戦略を生みだす

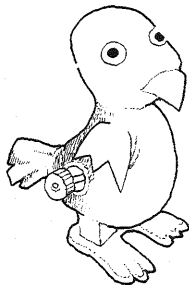
これに対してブルデューは、行為のやりとりの「不確

実性」、つまりお返しを受けるか否かは確率の問題であるとする。だから、「不確実性を再導入することは、時間をそのリズム・方向・不可逆性ともども再導入することであって、それはモデルの力学に替えて戦略の弁証法を立てることであるが、だからといって『合理的行為者』の理論という想像的人類学（『主観主義』）にふたたび陥るわけではない」（一六五頁）。

行為の不確実性を取り戻すというのは、結局「時間をそのリズム・方向・不可逆性ともども再導入」することである。行為が時間を媒介していることによって不確実性が生まれる。行為がいくら社会法則によって支配されているといっても、行為の時間的継起（行為が時間を追って展開される）、手順、成り行きから不確実性が生まれる。しかしだからと言って、「合理的行為者」の理論をふたたび主張するものではない。それは、主観的に意味付けられた目的に行為が支配されていると言う目的合理的行為のモデルに戻ることを意味しない。時間の導

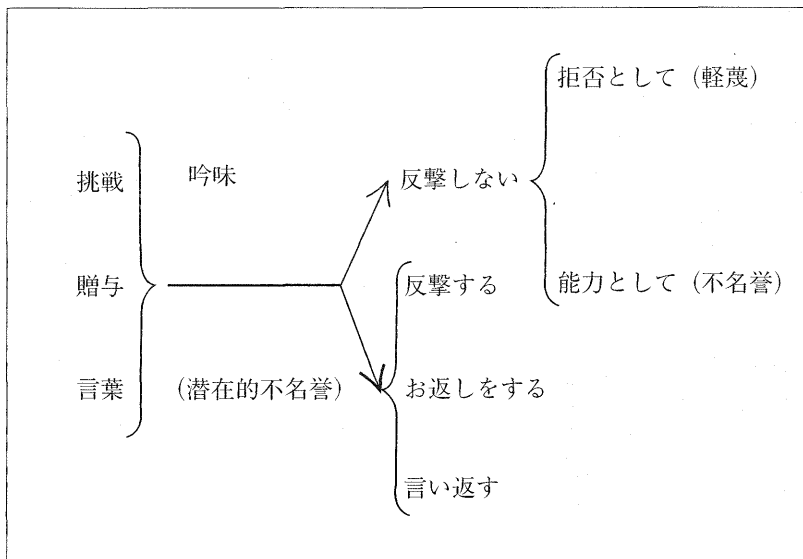
入は、「モデルの力学」とは違う「戦略の弁証法」を意味している。要するに、行為に時間を組み込むとは行為を支配している原理が「戦略」であることを認めることである。

このポトラッチのような「交換」に関して言えば、この実践を駆動する「戦略」は、「名譽に関する平等原則」という基本原則であり、「名譽感覚」である（一六六頁）。「挑戦と反撃、贈与とお返しの弁証法の動因は、抽象的公理系ではなくて、名譽感覚である」（一七二頁）。つまり、こうした交換はレヴィ・ストロースが主張するように無内容な「機械的法則」や「無意識的原理」への従属ではなく、行為者がもっている「名譽感覚」によって遂行されるのである。それは、行為者相互が「名譽」をまもろうとする争いであり、「相手の承認を含んで



いる点からして、当然の結果、返礼、反撃、お返し、言い返しの可能性を意味している」（二六六頁）。贈り物を贈られるとか言葉をかけられるといった「挑戦」を受けた人は、相手との関係―相手にするに相応しいか否かといったことを考慮に入れ、名誉をまもるという「戦略」のもとに、さまざまな行為をおこなうことになる。つまり、ハビトゥスの一種である「名誉感覚」にしたがって、行為者はその可能性の中から一つの行為を選択しているわけである。ブルデューは、その可能性を図式化している（二六七頁、図1参照）。

さらに進んで、こうした「ごく単純な」分類図式は「カピル族の『公平感覚』に適合した法的行為」に適応される原理として機能する（一六七頁）。それは、この社会の基本的分類図式である「昼／夜、男／女、外／内、など」と「社会的交換の論理（同額原則）」を組み合わせることにによって成立する（一六九頁）。こうした「適用原則」は盗みやもめごとの裁定の際に用いられ



▲図1 行為のやりとりの諸類型

る。この原則はハビトウスが帯びている特質、つまり不
確実性や不正確さをともなつた「暗黙の図式」として
「不正確ではあるが体系的な選択原理」として実践にお
いて機能する（二六九頁）。つまり、「昼／夜」といった
分類は、単に併置されているわけではなく、神聖さの面
で差異があり、昼は夜よりも高い神聖さが与えられてい
る。したがって、昼の盗みの方が罪が重いとされる。ま
た分類図式上で同等であるなら「同額原則」が適用さ
れ、同じ罰を受けることになる。

実践の論理は様式スタイルの統一である。この様式の統一は、
様々な状況に同一の暗黙の図式を適應することで実現さ
れる。そのため、正確さや厳密さが失われることも生じ
るのである。

さて、「間隔をなくすることは、戦略をなくすことで
ある」（二七六頁）。贈る―受け取る―お返しをする
といった行為を、レヴィイリストロースのように一連の「義
務」や「規則」、「原理」にしてしまうと、この三つの行

為の間に介在しうる「間隔」が消滅してしまうことにな
り、実際にはその時間的余裕の中で繰り広げられている
「戦略」も見逃されてしまう。この間隔、つまりそれぞ
れの行為の間に「挿入された期間は（贈与交換の中で
はつきり見てとられるように）短過ぎていけなく、
かといって長過ぎていけない」のである（二七六頁）。
返礼は「適切な時期に」「時宜を得て」おこなわれる必
要がある。そうすることによって、交換にともなう
「嘘」を自他に隠すことができる。つまり、贈った側の
恩の押し売り、贈られた側の負担感から逃れたいと言
う気持ちをともに隠すことができる。こうして贈り物の
交換が実は、一種の権力関係であることが隠蔽され、
「誤認」されることになる（二七五―六頁）。

時間の戦略化

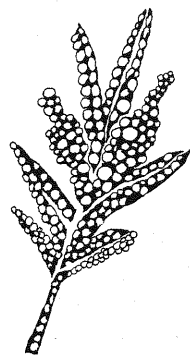
ブルデューは、時間を戦略的に用いる例をいくつかあ
げている。「実際、どんな社会でも見られることだが、

お返しは〔相手への〕侮辱になるのを覚悟の上でなら、延期されたり違ったものになったりするのである。全く同じものを返すことは、明らかに拒否に等しい」（一七四頁）。また、「〔余りにも急いで負債を返そうとすることは、一種の恩知らずである〕とロフシュフコーは言っている。：「これは」最初の贈与を、義務を押しつける意図からでたものだと非難する」（一七五頁）に等しい。なぜなら、「恩恵を受けた者は、返礼していない間は義務を負わされた者であつて、恩人に感謝の意を表さなくてはならない」（一七六頁）からである。さらに、「娘を嫁に求められる人は、もしその返答が否だとすれば、出来るだけ早く答える義務がある。：。逆の場合には、彼は出来る限り返答を自由に引き延ばして、懇請される自分の立場から生ずる状況的優位を維持できるが、最終的同意を与えてしまえば、直ちにその優位は失われる」つまり、『行為のテンポの操縦』Ⅱ時間の戦略は、「時期を待つ、延期する、待たせるⅡ期待させる、あるいは反対

に急がせる、早める、先を行く、不意を打つ、奇襲する、機先を制するなど」（一七七―七八頁）である。

「象徴資本」の機能

さて、「第七章 象徴資本」に移ることにしよう。客観主義、すなわち構造主義のように、時間を行為に組み込まないと、行為者の駆使する「戦略」が見えなくなるだけではなく、「象徴的労働」とその結果生産される「象徴資本」が、見逃されることになる。「象徴的労働」とは、利害にとられない交換という、「行為者たちが」本気で思い込んでいるフィクションによって、親族や隣人関係や労働が課してくる不可避で不可避的に利益を含



んだ関係を選択的な互酬性の関係へと変質させ、より深層においては、恣意的な(男による女の、長子による第二子の、年長者による若年者の)搾取関係を、自然において設立されるがゆえに持続性をもつ関係に変質させることを目指す労働である」(一八五―六頁)。つまり、「搾取関係」があるにもかかわらず行為当時者たちは、「利害にとらわれない」行為だと「本気で思い込んで」、つまり「誤認」によって、そうした関係を続けて行くというのである。「象徴労働」とは、「搾取関係」という利害にかかわる行為を、「利害にとらわれない」「無欲な」あるいは「無償の行為」と認めさせる、つまり「誤認」させることである。そうすることによって、男女間や兄弟間や世代間で行われる「搾取関係」を、「自然」なこととして黙認させ、損得勘定を度外視した「善意」や「愛情」によるものと自他に承認させることである。この場合の「利害にとらわれない」とか「自然なこと」とか「善意」や「愛情」とかは、「象徴資本」として、つま

り、人々を支配する権力として機能する。

こうした「象徴資本」の働きは、「集団が存在するための経済的基盤の再生産と同じ程度に、集団の存在にとって必要不可欠な再生産労働―祭り、儀式、贈与交換、訪問や礼儀、そしてなによりも婚姻―に介入するのである」(一八六頁)。すなわち、「象徴労働」は経済的な再生産労働に負けず劣らず、集団の再生産に寄与しているというのである。こうして、「贈与交換は〔平等な〕互酬性の持続的關係ばかりでなく、支配の持続的關係をつくりだす唯一の手段なのである」(一八六頁)。つまり「贈与交換」は、対等平等な互酬的交換を意味するだけでなく、恩義、恩恵、義理といった「象徴」的価値を受け取る側に負わせることによって支配関係をも生み出すのである。

「経済主義」と「象徴資本」

ところが、「経済主義」にはこれが分からないのであ

る。それは、経済的な要因にしか眼が向かないので、こうした象徴的な要因を見落とすことになる。これは、一種の「自民族中心主義」だとブルデューは断じている。だから、「経済主義」は「資本主義が生産する利益のほかに、どんな種類の利益も知らないので、その分析の中に、況んやその計算の中に『非-経済的』利益のどんな形態も組み込むことができないのだ」(二八七頁)と。

資本主義経済と「旧い経済」の違い

ついで、ブルデューは資本主義の経済と「アルカイックな経済」(アルカイックは、古風とか古代の意味であるが、ここでは資本主義以前の経済の意味である。以下では「旧い経済」としておく)を対比させて、「旧い経済」の特質、とりわけこの経済における「象徴的もの」の役割を例示している。つまり、「旧い経済」では、自然は労働の対象や経済的資源ではなく「偶像崇拜」の対象である(一八八頁)。また「旧い経済」における「不

動産担保契約」では、資本主義経済とは異なり、借金が返せなくなつたとしても不動産^{II}土地を借り方から取り上げることはできない。そうした契約は、「扶助」の一種だからである。つまり、この「旧い経済」は「贈与経済」や「善意の経済」とよばれるものであり、資本主義経済のような「剥き出しの損得勘定の経済」ではないのである。そこでは、「労働や労働の価格」が「無償の贈与」に変えられてしまうのであり、貨幣で支払われる代わりに「食事」や「終わりの宴」のもてなしで支払われたりするのである(二八九頁)。

さらに、「善意の経済」は親族や同盟者といった近い関係にある者同士の間での流通^{II}交換では、「貨幣を介在させる交換はまったく行われず」、逆に遠い関係にある者との交換では「純粹に『経済的』なもの」となる(一九〇頁)。(つまり、「旧い経済」においては、「善意の経済」と資本主義的な「経済」が混在しているのである。この点に注目されたい。)この「善意の経済」では、

「全面的な信頼」という「象徴資本」が物を言うのであり、そこでは商取引も仲介者の信用や権威といった属人的要因に基づいておこなわれる。それは婚姻の場合も当てはまる。つまり、婚姻の際に「大きな威信をもった親族や同盟者」を介入させるのであり、その「威信」は「象徴資本」として機能する（一九二頁）。

こうした流通のみならず、生産もまた「象徴」によって隠蔽され、「抑圧される」。農民の「労働」は経済的な意味で正当に評価されることはない。それは、「労苦」であつて対価を支払われる「労働」ではない。「自然は贈与交換の論理にしたがつており、農民の労苦を自然への貢物として与える者にだけ恩恵を授けるのだ、と理解される」（一九三頁）。また、「労働生産性があまりにも低い」ため、自分の労働の「無意味化」を回避するため自分の労働時間を計算することはしないのである。さらに、「時間の希少性があまりに低く、かつ財の希少性があまりに高い世界においては農民は、豊富にある唯一の

もの、自分の時間を勘定せずに支出する、つまり時間を浪費するより以上のことはなしえない」（一九四頁）。要するに、「旧い経済」では資本主義的な意味での「労働」は存在しないのである。

「象徴」とは？「象徴資本」とは？

自然的世界の「脱魔術化」（ウェーバー）によつて、「労苦」は「労働」へ、「贈与」は「商取引」へと変わり、経済的利益が自己目的化するようになる。こうして、資本主義以前の神聖なものとされた活動は、純然たる象徴的行為になる。さて、ここでブルデューは、「象徴」とは何かについて説明している。すなわち、「象徴」とは、具体的、物質的な効果を欠いた、要するに無料の（*gratuit*）、つまり損得を離れた、しかしまた役に立たぬものと言う意味である」（一九五頁）。つまり、それは「信用」や「威信」や「善意」のような具体的物質性を欠いた経済的な価値を有しない精神的な価値や意味と

言つてよいであろう。

さらに「象徴資本」についてブルデューは定義している。「象徴資本とは、正当だと承認^ホ感謝^キされ、つまり資本としては誤認された、この否認された資本 (capital *denie*) に他ならない (承認とは、この承認のひとつの基礎でありうる恩恵 (*bienfaits*) が引き起こす感謝 (*gratitude*) という意味だ)。この資本は多分、宗教的資本とともに、経済資本が承認されない時には、唯一可能な蓄積形態をなすのである」(二九五頁)。つまり、そうした精神的な価値や意味が、多くの人々によって「承認」されること、そのことによって人々はその価値に「感謝」するようになるものということである。要するに、集団が公認する精神的な価値であり、その集団のメンバーを従属せざるを得なくさせる力であり、資本である。

「象徴資本」と

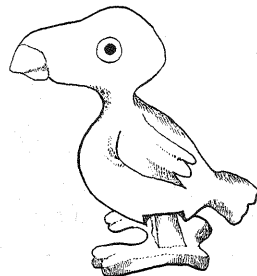
「経済資本」の

相互転換

前述したように、
「旧い経済」において

は、「善意の経済」つまり「象徴資本」と資本主義的な「経済」が混在していると述べた。この二つの経済は、混在しているだけでなく、相互に転換しうるものである。すなわち、名望家は農閑期に何くれとなく農民に「扶助」を与えておくと、刈り入れ時のような繁忙期に多くの農民を一気に動員することができる。これは、「象徴資本」の「経済資本」への転換に他ならない。つまり、名望家のもつ支配力は、「象徴資本」(他人に感謝され、尊敬されることによる精神的支配力) によって維持されているのだ(一九六頁)。

さらに、「象徴資本」は親族や同盟者のネットワーク



を動員できる力でもある。その結果、「象徴資本」は物的利益をもたらすことができる。つまり、ここでも「象徴資本」は「経済資本」に転換しうるのである。また「象徴資本」は、顔が利くといったように、「信用資本」として市場においても機能する。

最後に確認しておけば、信用といった「象徴資本」は「集団の信じ込み」が、集団の有力者に与える信用によって蓄積されるものである（一九八頁）。逆に言えば、それだけに「象徴資本」は危^{あや}ういものなのである。なぜなら、「象徴資本」を有力者に与えるのが集団なら、逆にそれを奪^ううのもまた集団だからである。しかも、それは「認める」、「承認する」といった人々の認知行為（註4）に依存しているのだ。さらに、名誉は計算不能なもの、つまり分割して計算できないものなので、少しでも評判が落ちるととり返しのつかないことになる。そのうえ、有力者に対しては、スキヤンダル好きな人々による噂話や当てこすりによって、常に集団的な名誉毀損の攻

撃がなされるものなのである（二〇〇頁）。だから、「象徴資本」の維持や拡大は、多大の労苦を要するものなのだ（二〇一頁）。

（上越教育大学）

註

1 M・モース『社会学と人類学Ⅰ』有地享、伊藤雅司、山口俊夫訳、弘文堂、一九七三年。

2 M・モース、前掲書、三二八頁。

3 同右、二九頁。

4 「象徴資本」の説明概念である「認める」、「感謝する」

「誤認などの語根は *comitare* であり、「認識する」と言う点で共通していることに注目されたい。

遊びを通して子どもの育ちを考える(5)

シュレッダーから生まれたラーメン屋さん

阿部 康子

新年早々には雪が舞い、一面の銀世界となって子どもたちを喜ばせたものの、その後はすっかり暖かい冬となり、毎年必ず少しではあるが出現して子どもたちを驚かせ、喜ばせる霜も、霜柱も、氷が張る、水が凍るということも全くなく日がすぎている。それでも、子どもたちは温かな日差しの下で風を揚げたり、バドミントンや鬼ごっこに興じ、部屋では双六作り、コマ作り、メンコ作りを中心に、個人の力を競い合う遊びが生まれ、続い

ていた。二月に入り、何か子どもの遊びに刺激となり、変化が生まれるきっかけとなるような素材はないものかと思いつく。たまたま我が家で使っていた家庭用シュレッダー（スーパーなどで売っている簡単なもの）が目に入った。ままごとコーナーに置いてみよう、子どもならどう使っていくのか見てみよう、と思い立ち、翌日ままごとコーナーに置いた。

二月四日(月) 登園した、さとこ、ななこは、ままごととコーナーに置かれたシュレッダーを素早く見つけて、

「せんせい、これなあに？」とシュレッダーを持って見せに来た。「これね、面白いのよ。やってみようか」と

広告紙を入れてハンドルを回す。紙がどうなるのかとじいつとシュレッダーの中を覗き込んでいた二人は「わあ、おうどんだ！」と大笑い。しばらく見て「家にあるよ」とさとこ。「えつ、さとこちゃん家にあるの、誰が使うの」「お母さんが手紙なんか使う時にやってるよ」

「へえー、さとこちゃんもやったことある?」「私はないけどね」「じゃあ、やってみる?」と二人にやりかたを説明してシュレッダーを預けた。二人が面白そうに始めると、登園した人達も次々と取り巻き、シュレッダーに紙を入れてはハンドルを回し、どんどん切っていく様子を眺め、そして「私に貸して」「僕にやらせて」と子どもたちの間を忙しく回った。シュレッダーにかけられた広告紙の山がままごととコーナーの鍋やボールに山盛りになり、それでも入りきらずままごととコーナーに散ら

ばっていった。誰かが「ラーメンだ」と言ったが、それ以上には進展しなかった。

ラーメン屋さん一回目

二月五日(火) こうき、たつま、ゆうすけが登園一番の遊びに、ままごととコーナーで広告紙をシュレッダーにかけ、どんどんラーメンを作ろう、と始めた。しばらくすると、こうきがシュレッダーを独り占めする。と、たつま、ゆうすけが怒り、ラーメン作りをやめ、園庭に出て行ってしまった。こうきは少しの間ラーメン作りをやっていたが「せんせい、たつまたちどこ行った?」と聞きに来て、「お庭へ行ったよ」と答えると、「俺も行ってくる」とラーメン作りをやめ、たつまとゆうすけを追って園庭へ行ってしまった。

たかゆき、りょうへいがままごととコーナーに入り、所狭しと細長くカットされた紙の山に手を入れたりほぐしたりしていたが、たかゆきが「ラーメン屋をやるで、来て」と呼びに来た。私がお客に行き、ラーメンを食べる

が、他に来てくれる人がいないので、二人はラーメンと言っていた紙の山をビニール袋に詰め、部屋の真ん中でボールのように投げ合つて遊び始める。

シュレッダーが空いているのをみさと、あやかが見て、ままごとコーナーに入り、広告紙を切り出す。そこへ、ことむ、わたるが入り、再びラーメン屋さんが始まった。わたるは積み木で台を幾つか組み「ラーメンですよ、来てください」と繰り返しまわりの子どもたちへ声を掛ける。「せんせいも来て、大盛りラーメンです」とご馳走してくれる。るりが「私も食べたい」とお客として加わった。「ラーメン食べにいつてらっしゃい。美味しかったよ」とさとこやななこに声を掛けるが、「今日はいい」と参加せず、ちよつと寂しいラーメン屋さん開店で終わった。

その後、数日間は、生活発表会の相談をしたり、メンコやコマの大会が始まったりと、それぞれの遊びが中心となつて、ラーメン屋さんはお休み状態となつた。

ラーメン屋さん二回目

二月十二日(火) 登園活動を終えたみさと、あやかが、二人で作つた「お買い物双六」を棚から出し、さとこ、さくみを誘つて始めた。みかこ、ことむが「ウサギのご馳走!」と、それぞれパンの耳、野菜屑を持つて登園したのをきっかけに、あや、れみ、あやみ、あすかも誘い、六人で飼育小屋のお掃除に出る。園庭ではたつま、こうき、ゆうき、たかゆき、たつや、りょうへい、ゆうすけが、総合遊具(滑り台、雲梯、登り棒などが組み合わされている)を拠点にゾンビごっこに興じている。飼育の世話を終えて部屋へ戻ると、ままごとコーナーでみさと、あやか、さとこ、さくみが何やら忙しげに動いている。「双六は終わったの?」と近付いて声を掛けると、「うん、ラーメン屋さんをするの」と嬉しうに話し、さとこ、みさとがラーメンを作る人、あやかとさくみがお店を作る人と教えてくれた。ラーメンを作るとさとことみさとは、広告紙を切つてはシュレッダー

にかけ、お鍋に入れていく。見る間にお鍋はラーメンの山となる。ザルにも大皿にも、ラーメンはどんどん山を作っていく。時々二人は、「これ位でいいか」と顔を見合わせてはけけら笑い、またシユレットを回している。

一方、お店作りのあやか、さくみは、ままごとコーナーを広げようと、少し離れた場所に屏風を二枚繋げて立てて店にする。屏風の両面の床に積み木を並べ、階段を作る。そこへれみ、あすか、ななこ、あやみが「私もやる、入っていい?」「いいよ」で、ままごとコーナーを中心に賑やかになった。ラーメンを椀に盛る人、葱がいる、とれみが材料探して忙しい。ハムはどうするかあすかとななこがもめたが、今日は無しとなる。

そこへ、たかゆきとゆうすけがお客として来店する。二人は「ラーメンくれ」とコーナーへ向かって声を掛けるが、コーナーでは誰もが自分の思いに夢中でラーメンを作っているの、注文を取りに来ない。ゆうすけは「注文聞いてくれん」と怒って出て行こうとする。たかゆきが「俺が言ってくるわ」と、ラーメン作りのコーナーへ行き、ラーメンの盛られた椀を両手に「葱も入っとる」とゆうすけのところを持って来て満足そうに食べる。そこへたつま、こうき、ゆうき、



◀年中さんも来てくれた

りようへいが「何やつとる?」「ラーメン食つとる」「俺たちもラーメンくれ」と仲間入り、けれどもうお店はいっぱい!するとたかゆき、ゆうすけが「俺たちおわたたで」と席を譲る。そして「銀行やろう」と二人が広告紙でお金を作り始めた。これをきっかけにお金作りに仲間入りする人、食べにいく人、作る人が、今度は俺、私と役割を替わりながらメチャクチャ賑わってラーメン屋は終わった。

ラーメン屋さん三回目

二月十四日(木) 登園の早いりようたとりようへいが「サッポロラーメン」をやるうと言い出し、みさととれみが「私もやる」と仲間入りした。りようた、りようへい、みさと、れみがままごとコーナーを屏風で囲い、積み木を並べ、お店作りを始める。あやか、たつま、ゆうすけも仲間入りして店員になる。女の子たちは麺になる元の紙を切る(シユレツダーの口に合わせて切つて入れるためである)。たつま、ゆうすけがシユレツダーにか

けてラーメンにしていく。

てつや、たつやがお金を作り、お客としてラーメンを食べに来る。てつやが「塩ラーメン一丁」と注文する。「俺は醤油ラーメンにして」とたつやも注文する。まま

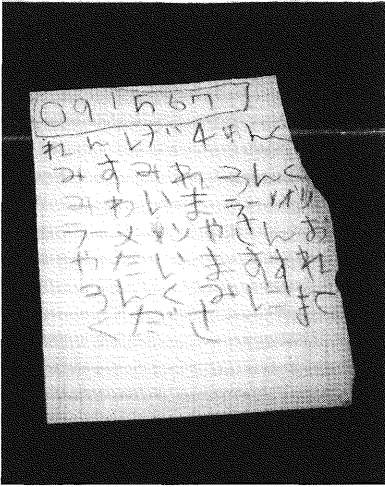
ごとコーナーの中は大忙しとなり、「僕作る人になる」と、りようたの大活躍となる。登園した人たちが次々とお客にくるのでお店は満員!

お店の横でりようへいとゆうすけがラーメンのメニュー、値段表を作り始めた。りようへいが「僕がやる」と何度も言うがゆうすけが譲らず、返事をせず書き続けるが、上手いかず、りようへいに場を譲り、書くのを替わる。りようへいは得意気に書いていく。

たかゆきがりようへいに寄り添って書き上がっていくのを眺めながら、携帯電話を手に「はいはい、塩ラーメン二つですね、すぐお届けします」「はいはい、チャーハン二つですか、少し待って下さい」と電話の注文を受けている。たかゆきは横にいたゆうたに「注文とるの替わって」と携帯電話を渡し「ラーメンを茹でなきゃ」と

コーナーに入り、ラーメンを鍋に入れ、茹で始める。りょうへいのメニューは出来たのかな、と見ると、たつや、ゆうすけも床に座って何か書いている。それはれんげ組（年少組）、たんぼぼ組（年中組）さんへの招待状であった。

店ではゆうたがお客の注文に応じて「チャーハン一丁」とコーナーに声を掛けると、「はい、チャーハン一丁」とチャーハンが出る。れんげ組さんが先生と一緒に「ラーメン屋さんはこちらですか」と大勢訪れてくれ



▲年少児に書いた手紙

た。続いて年中さんも来てくれて、保育室はお客さんとラーメン屋さんの人とても大変な賑わいとなった。ラーメン屋の子どもたちは嬉しくて大変である。たつやは、「飲み物はウーロン茶、オレンジジュース、コーヒー、カルピス、何でもありです」と満面の笑顔でサービスに努める。りょうへいから「なんでもありじゃないよ」と苦情が出るが「いいの、いいの」と意に介しない。そのうち、れみが「薬味がいる」と言い出した。シュレットダーにかけた紙を半分に切った状態で、紙を横にしてもう一度シュレットダーに入れると、紙は細くなる。これを葱のみじん切りとしてラーメンにかけてあげることになった。小さいお客さんは、年長組のもてなしにびびくりしながら大満足して、次々と交替して賑わいは続き、十一時に閉店した。

お弁当を食べている時、年中さんの先生が子どもたちを連れて「ラーメン屋さんは今日で終わりですか?」と訪れた。私が「どうしたの?」と聞くと、「ゆうすけ君から招待状を受け取ったのが十一時頃で、皆で駆け付け

ただけど終わっていて、皆がっかりしているんです」と言う。そこで皆に「たんぼぼ1組さんが今日のラーメン屋さんに来れなかったんだって。とつても残念がつているんだけどどうしよう」と相談する。話を聞いていたたつま、たかゆきたちが「明日もやるよ」、たつやが「明日早く来ればいいよ」と言ってくれて、年中の先生も子どもたちも「じゃ、明日来るからね、ありがとう」と帰っていった。

ラーメン屋さん四回目

二月十五日(金) 年中児のまさととは本当に楽しみにしていたようで、八時三十分朝一番で登園し、すみれ3組のお部屋へ「まだやつとらん?」と聞きに来た。「お兄ちゃん、お姉ちゃんがまだ来ていないの、もう少し待っててね」と言うと、「ぼく、すみれ3組の地図を描いてくるわ」と勢いよく自分の部屋へ帰っていった。

しばらくしてりょうた、たつや、ゆうすけ、たつまが登園した。まさどが早くから登園し、ラーメン屋さんの

開店を待っていてくれることを伝えると「どつばやい」と驚きながら、たつやの「よっしゃ!」の声でラーメン屋の準備が始まった。

お店作りは、たつやが「ここんとこ広い方がいい」と言うのと「そうだね」とりょうたも了解、ラーメンを作っているコーナーと、お客さんの食べるテーブルとの間を通れるように積み木を組んでいく。

登園して来たななこ、あやか、りょうへいがシュレツダーを回し、「俺たちラーメン作るわ」とシュレツダーで麺や御飯を作る(御飯はお葱のみじん切りと同じ要領で作る)人となる。るり、さとこ、さくみがお金の担当、レジを置く場所作りで話し合っている。てつや、ゆうた、ゆうすけ、たつまが「注文とる人ね」とお客さん担当となった。皆に遅れて登園したみさとは、忙しそうな部屋の空気に押されてか、何をしたらよいか分からぬ様子で、しばらく立ってままとコーナーを眺めていた。私から声をかけようと思っていると、ななこがみさとに気がつき「こっち手伝って」と声をかけ、手招きを

◀小さいお客さんは、年長児のもてなしにびつくりしながら大満足



してみさとを呼び入れた。

お金担当の人達が、おもちゃとラーメンのセット券を出そうと言い出し、まずは今

まで作って棚に置いていたドングリゴマ、ビー玉迷路、手裏剣、双六、ブーメランなどを持ち出し、レジの場所で売り出すことになった。

九時三十分開店となり、笑顔で待ちに待っていた年中組のまさと君が、地図を手に持って一番に入り、レジで見せる。「上手」とさとし、さくみに褒められ、笑顔でセット券を受け取り、積み木のカウンターに嬉しそうに腰掛けた。たつやが「何がいい？」とメニューを丁寧に説明してあげている。まさとくんは「醤油ラーメン！」と声を張り上げ、ワクワクしながらラーメンを待つ姿があった。今日も大勢の小さいお客さんを迎えて保育室は賑わい、熱気に溢れて、四日も続いたラーメン屋さんが終わった。

保育者が再び子どもから貰ったもの

二月四日（月）、ままごとコーナーにシュレッダーを置いたことが一つのきっかけとなり、ラーメン屋さんの始まりとなった。シュレッダーに紙を入れハンドルを回すと、紙が綺麗に裁断されて出てくる様子を見て、子どもが「おうどんみたい」と言ったように、ラーメンをイメージし、ラーメン屋さんを思いついたのは当たり前前のことであつたと思う。

しかし、たかゆき、りょうへいが思いついて開店した二月五日の第一回目のラーメン屋さんでは、お客が保育者一人ということで、ラーメンはビニール袋に詰められてボールとなって遊ばれている。

その後は、今月末にある生活発表会の演じ物や、それに関連する話題、内容作りもあったが、なによりもシュレッダーで紙を切る面白さに子どもたちの関心が集まり、どの子どももひたすら広告紙を裁断した。そしてクラス全ての子どもがシュレッダーを思うままに使える（いろいろな切り方を発見した）ようになった。そして子どもたちの中に一つの満足感とゆとりが生まれ、二月十二日（火）第二回目のラーメン屋さんが出現したように思う。ここでもクラスの皆がラーメン屋さんになったり、お客さんになったりと、一見混乱したような雑然とした状況の中でラーメン屋であったが、子どもたちの中に「面白かった！」があり、十四日（木）第三回ラーメン屋さんへと進んだように思う。この日のラーメン屋さんはお店を作る、メニューを作る、招待状を作るといふよ

うに、開店に必要なものが考え出されていった。更に、十五日（金）の第四回ラーメン屋さんでは、麵を作る人、お金の係の人、接待係の人と言うように役割がはっきりとなり、更にお客さんがゆつくりできるような席作り、新しくおもちゃとラーメンのセットの券が出るなどの工夫が生まれるなど、ラーメンさんはより内容豊かとなって子どもたちを満たしていった。

二月四日～二月十五日の経過の中で、ラーメン屋さんごっこという遊びが、子どもたち自身の中で少しずつ少しずつ膨らみ熟成していったように思われる。

私は、担任となった四月から、卒園まで残された日は一か月という今までの、すみれ3組二十六人の子どもたち一人一人と過ごしてきた生活を振り返りながら、育てていったものをもう一度確かめるよい機会をもらった、四回のラーメン屋さんであった。

——終——

（愛知双葉幼稚園）

立ち止まってみたら

榊田 正子

昨年の三月、私は保育の現場を退職した。在職中は立ち止まって周囲を見回すこともなく走り続けてしまったような生活だったので、退職の直後は、毎日定刻に出かけず、身近に子どもの歓声や足音の聞こえない生活に身の置き所の無い戸惑いを覚えたが、間もなく、走る時と立ち止まる時の両方を含めて私の人生が与えられているという、当たり前のことに気づくことができた。そして足を止めたこの一

年、今までは見えなかったことを垣間見たり、気づかなかつた視点に触れたりして、それらを味わいかみしめる豊かさを与えられたように思う。以下はそんなやさやかな体験である。

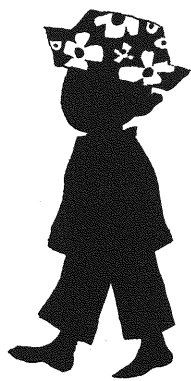
それぞれの子育ての支援

この一年、色々な機会にたくさんの方の母親と子ども達に出会った。

伝い歩きを始めたMちゃんを抱えて、乳児の成長の様子も関わり方もわからず、誰かに聞くこともできず、不安と戸惑いの中にうずくまっていたAさん。同年代の子ども達と遊びたくて周囲のことに気を取られ食事や生活上のことがおろそかになりがちなY君を、許容できずに激しい叱責を繰り返してしまい、その自分にも苛立ってしまうBさん。またCさんは、小学生の二人の子どもを連れて新たな生活を組み立てていかねばならない苛酷な状況に疲れ果てていた。専門家のアドバイスを受け、ともかく自分を取り戻して生活のめどをつけるまでの少しの期間子ども達を施設で預かってもらうという一大決心をして、そのことを子ども達の通う小学校に報告に行ったところ、「そんなことをしたら子どももとってマイナス」と諭され、再び途方に暮れてしまった。みんな重い状況を背負いながら、子どもを抱えてギリギリの一日一日を過ごしている母親たちである。

ここ数年、「子育て支援」という言葉が社会的承認を得、行政的にもまた保育の実践の場でも様々な取り組みや方向性が打ち出されている。それは現代社会において確かに必要なことであろう。だが前述のAさんやBさんやCさんの様子を間近にし、その子ども達の遊び相手にもなったりする中で、私は、制度だけでは埋まらないそれぞれの子育て支援の必要性を痛感した。

支援というほど大きなことでなくても良いのかもしれない。時には「あらMちゃん、歯が生えてきたわね。少し固いものも食べられそうね」といったちよっとした一言や、共に生活する者同士の小さな



感覚の共有でも、そこに個別の温かい関係性を実感できるような行為であれば、意味を持つに違いない。「子育て支援」事業の推進で「子育て支援はこゝと足れり」とせず、まさにそれぞれの子育てにも思いを添わせていく姿勢を忘れてはならないと感じたのである。

保育を伝える

将来の保育者を目指している学生達に話をする機会にも恵まれた。できるだけ実践に即した理解と視点を得てほしいと願って事例を多用したが、そこで考えさせられたことがあった。

それは、実践を丁寧にわかりやすく表現した良い事例と思われるものを選んだつもりであったにもかかわらず、そこから現場の状況がなかなか伝わっていかないもどかしさを幾度となく感じたことである。仕方なくさらに細かい周辺の状況説明や解説を加えて、ようやく学生の表情に「ああ、そういう場

面なのか」といった微笑みが見られることになるのだが、どうもすっきりしない後味が残ることも多かった。

何故そうなったのかという点から言えば、精選したつもりであった事例も自分だけの思い込みであったのかもしれないし、また情報の受け手である学生側にも経験にばらつきがあったり、文字から状況をイメージする力が様でないということも考えられる。しかし何故なのかということよりも、情報の発信・表現方法という点で、私自身がこの実態から大きな課題を突きつけられた気がした。

実践の場にいる者として私は、子どもと保育者が創造していく保育の様相やその核心を、保護者や研究的立場にある人々と、また連携の必要性が増している保育所や小学校の人々と共有し、考え合っており、育ちつつある子ども達がより健やかに育つ環境を探していきたいと思っている。

この思いでこれまでも多少なりとも努力をして

きたつもりである。しかしその肝心な保育の核心は的確に伝わっているのだろうか。努力は的を突いていたのだろうか。保育を大切に思うがゆえに、それを表そうとする時に使う言葉や表現などにこだわりを持って、私自身は否めない。そういう自分自身を自覚しつつ、独り善がりにならないように保育を伝えるということを、課題として改めて考えてみたい。

卒園児の便りから

昨年の三月に卒園して小学校に進学した子ども達から、何通かの便りをもたらした。一通一通が在園時の姿を思い起こさせ新たな味わいをもたらす嬉しいものであったが、その中でH子の便りは特に印象に残った。

それは、小さなカードに三人の人間と小さな物がいくつか描いてあり、母親の添え書きに「先生にお手紙を書くと言ってこの絵を描きました。」S子

ちゃんとしてますだせんせいがか〜といつて、わたしが〜をしてるの」と今日の前のことのように詳しく説明してくれました」とあった。何故印象的であったかという点、H子が詳細に母親に説明したその状況―H子や一緒に居たS子と私とのやりとり、彼女が作って持っていた物の形や色など―を、実は私も鮮明に憶えており、H子の記憶とぴったり一致していたからである。

H子は三歳から三年間在園したが、その絵の場面は四歳一学期のことである。H子が画用紙に描いて切りぬいたクッキーを職員室にいた私に届けてくれることを何回も繰り返すという、どこでも見られる場面である。この時以外にも在園中に私とは色々な機会に関わりを持ち言葉を交わしていたのに、どうしてH子は二年も前のことになるこの場面をそんなに詳しく憶えているのだろうか。丁度その頃、長らく固定しているH子とS子の関係について、もう少し緩やかに開かれたものになることがH子とS子の

双方にとって良いだろうと担任が考えていることを知っていたので、クッキーを持って私の所に来た二人に、私は関わり方を考えながら「H子ちゃんには今度は〜」「S子ちゃんは〜」と対応した。そんな私の言葉をH子は大きな声を上げて嬉しそうに笑いながら聞き、S子と顔を見合わせていた。私自身は色々考えながらのやりとりだったので、その時の気持ちを含めてはつきりとした記憶があるのだが、特にここでH子と深く共感したというような印象は無い。

H子の心はその時どのように動いていたのだろうか。彼女にとってあの状況はどのような意味を持ったのだろうか。楽しかった幼稚園生活の思い出の一端まであるのだから、少なくとも何らかのプラスの意味合いがあるのだろうか……。

保育者はそれぞれの子どもの育ちがより充実したものであるようにと常に願いながら保育に臨む。子ども達はそういう保育者や仲間の子ども達と関わり支えられて生活を展開し、体験を積み重ねていく。

そこでの一つ一つの関わりが子どもにとってどういう意味を持ったのか、果たしてあのような対応で良かったのか、もつと違う関わり方があったのだろうか、という疑問を保育者はいつも持つてはいるが、よほど特徴的な展開が見られるでもなければ、すぐにその答えが出てくることはない。

それらはいつの間にかより大きな育ちの流れの中に溶け込んで、また新たな疑問に置き換わっていったりする。時にはH子の例のようにずっと後になつて不思議さを浮き立たせることもあるし、また、多分あの対応で良かったのだろうと微かな安堵をもたらず場合もある。

考えてみると、日々このような疑問を持ち続け、不思議さに出会えるということが、子どもの育ちを信頼しつつ保育に臨む保育者の姿勢を創り出し、子どもと生き生きと向き合う場合の支えとなっているように思われるのである。

(元お茶の水女子大学附属幼稚園)

編集後記

三月になると思い出すのはツクシ
摘みです。子ども時代、近くの川の
堤防はわが家の庭の延長でした。春
は、まだ何も芽吹いていない一面の
枯れ草の土手に、ツクシが頭を出す
ところから始まります。「あつた、
あつた」と見つけるのが楽しみな時
期の次は、取っても取っても尽きる
ことのないツクシ摘み。私は、日が
な一日、堤防で遊びほうけていまし
た。
倉橋惣三は、「春になる」の中で
次のように書いています。

*

世間の俗用に忙しいおとなたちは、その小さい春の子ら―草の芽

や、かわいらしい蕾や、やわらかく
うるおう土のつやや、ひくく立ちそ
めるかげろうのいきに、なんの気も
とめなかつたりしますが、生来の自
然詩人といつてもいい幼い子らは、
いつも敏感に、それらの春の子らの
足音を感じます。殊にそれは、野に
近く住む子らの大きな楽しさであ
り、幸福であります。(子どもの心
とまなごしで『フレールベル館』)

*

日が沈みかけ、いつぱいのツクシ
をもつて帰ると、母はそれをお盆に
のせ、一つ一つはかまをとつてくれ
ました。その手さばきのみごととな
と。見る見るうちに積み上げられて
いくはかまの山を、私はまるで魔法
にかかったように見つめていまし
た。こうして、ツクシは夕食のおか
ずになりました。

(伸)

幼児の教育

第一〇二巻 第三号

(二〇〇三年三月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十五年三月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二丁目一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五丁目二丁目

発売所 株式会社 フレールベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一四―九

☎〇三―五三九五―六六一三(営業)

☎〇三―五三九五―六六〇四(編集)

振替 〇〇―一九〇―二二―一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレールベル館にお願いいたします。



21世紀保育ブックス

これからの保育はどの方向へと向かっていくのか。

新しい21世紀の保育を展望しながら必要とされる諸問題を根本的に掘り起こし、
確実に保育者を導き育て、将来の保育への指針を与える新シリーズ！

好評発売中!

編集委員 森上史朗(子どもと保育総合研究所代表)

柴崎正行(東京家政大学教授)

柏女霊峰(淑徳大学教授)



21世紀保育ブックス ⑪

保護者の要望をどう受けとめるか 苦情解決・第三者評価に求められる保護者への説明責任

小笠原文孝 よいこのもり第2保育園

延長保育、休日保育、夜間保育など、子育て支援として園が果たしている機能は、依存性の強い親にしていこうと、決して同義語ではないのです。「子育て支援」とか、「共に育児を考える」ことの根底には、園側の説明責任と応答責任、そして行動責任をもつことがあります。そして親自身が社会的自己責任を獲得して、それを双方が認め合う上に成り立つものだと言えます。園と保護者とが共に育ち、支え合う方法を探ります。

B 6判 168頁 定価：本体1,200円＋税



21世紀保育ブックス ⑫

保育所と幼稚園～統合の試みを探る

吉田正幸 幼児教育21研究会

保育所と幼稚園は、同じような年齢の子どもを教育・保育する施設であることから、かなり以前から一元化が言われてきました。福祉的な要素の強い保育所であっても、教育的な要素の強い幼稚園であっても、子育て支援の機能をどう持つかという点では共通しています。言い換えると、子育て支援という枠組みにおいて、保育所と幼稚園の垣根はほとんどありません。つまり、より大きな意味があるのは、保育所や幼稚園の施設ではなく、そこで発揮される機能なのです。すなわち、保育の理念に行き着きます。本書では、これまでの一元化の試みと、これからの多元化・統合への道を探ります。

B 6判 208頁 定価：本体1,200円＋税

既刊本

- ①新しい教育要領・保育指針のすべて
- ②新時代の保育サービス
- ③カウンセリングマインドの探究
- ④子ども虐待の理解と対応
- ⑤知的好奇心を育てる保育

森上史朗 著
柏女霊峰・山本真実 共著
柴崎正行・田代和美 共著
庄司順一 著
無藤 隆 著

- ⑥保育者の「出番」を考える
- ⑦地方自治体の保育への取り組み
- ⑧乳幼児期の「心の教育」を考える
- ⑨自由保育とは何か
- ⑩保育者が出会う発達問題

吉村真理子 著
山本真実・尾木まり 共著
阿部和子 著
立川多恵子・上垣内伸子・浜口順子 共著
大場幸夫・前原 寛 共著

<以下続刊>

キンダーブックの
フレール館

0・1・2歳児の子どもたちが毎日滑いのある生活を送れるようにするための保育実技シリーズです

乳幼児を迎える保育室の環境
づくりのヒントが満載!



0・1・2歳児の 赤ちゃんHOIKU実技シリーズ 1

笑顔がいっぱい

わくわく保育室

- ・乳幼児のためのかわいい誕生表、保育室を明るくする壁面飾りのアイデアを数多く紹介しました。
- ・保育室をすてきな空間に変える生活環境便利グッズの数々には、牛乳パックで作る「みんなの帽子入れ、キルティング布を使った「遊べるおむつ替えマット」、段ボールと布の「どこでもまど」など、身近な素材で簡単に作れるものばかりです。
- ・「保育のワンポイントアドバイス」つき。
- ・作り方と型紙もついています。

阿部 恵 編著 AB判 96頁 定価：本体2,200円+税

0・1・2歳児が喜ぶ、手づくり
おもちゃ・プレゼントのアイ
デアがいっぱい!



0・1・2歳児の 赤ちゃんHOIKU実技シリーズ 2

げんきわくわく

手づくりおもちゃ・プレゼント

- ・感触のよさやなめても安全なもの、洗濯のできるものなど、乳幼児のおもちゃが備えなければならない特色と“手づくりのよさ”を生かしたおもちゃ・プレゼント・誕生カードのアイデアを多数紹介しました。
- ・おもちゃを手づくりするには、時間も手間もエネルギーも必要ですが、工夫する楽しみ、完成の喜び、子どもたちが手にして喜んでくれる姿を見るとき満足感は、それらに費やした苦勞を吹き飛ばしてくれそうです。
- ・「保育のワンポイントアドバイス」つき。
- ・作り方と型紙もついています。

阿部 恵 編著 AB判 96頁 定価：本体2,200円+税

キンダーブックの
フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

定価 五五〇円(本体五二四円) ☆